調査年報1

昭和63年度

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

発行にあたって

財団法人　北海道埋蔵文化財センターは、道内の埋蔵文化財の発掘調査及び文化財の保護並びに活用に必要な事業を行うことを目的に、昭和54年9月1日に設立されてから、はや10年を迎えることになりました。

この間、発掘調査事業量の増大に伴う調査員の増員、施設の移転拡充など幾多の問題をかかえましたが、幸いにも今日まで事業を推進することができましたのは、ひとえに関係各位のご理解とご協力の賜物であると存じます。

発掘調査の成果につきましては、逐次、調査報告書を刊行し利用者の便をはかるとともに、一般向けには現地での報告会や写真パネル、出土品による展示会を実施してきたところですが、このたび、これに加えて各年度毎の調査概要を網羅した調査年報を刊行することといたしました。これにより、当センターの事業や活動状況についてのご理解を深めていただけますれば、当方の喜びといたすところであります。

これまでの関係各位のご援助を深謝し、より一層のご支援ご鞭撻をお願い申し上げる次第であります。

平成元年3月

財団法人　北海道埋蔵文化財センター

理事長　澤　　宣彦

目　　次

Ⅰ　昭和63年度の調査 …… 1

1　調査の概要 …… 3

美沢3遺跡 …… 3

美利河1砂金採掘跡 …… 7

東広里遺跡 …… 11

モンガクA遺跡・モンガクB遺跡・モンガクF遺跡 …… 15

栄町5遺跡 …… 21

忍路土場遺跡 …… 25

忍路5遺跡 …… 29

西野幌12遺跡 …… 33

納内6丁目付近遺跡 …… 37

国見2遺跡 …… 41

納内3遺跡 …… 44

牛舎川右岸遺跡・牛舎川左岸遺跡 …… 48

2　研修・研究会等 …… 50

3　組織と機構 …… 52

Ⅱ　調査の歩み …… 53

1　調査の歩み …… 53

2　調査の概要 …… 53

3　刊行調査報告書 …… 61

凡　例

・Ⅰ「調査の概要」で遺跡名の後に付した（　）内は、埋蔵文化財包蔵地登載番号である。

・各遺跡の位置図は、それぞれ国土地理院発行の2万5千分の1あるいは5万分の1図を複製利用したものである。

Ⅰ　昭和63年度の調査

本年度の調査は、発掘調査が10遺跡、事前発掘調査（試掘調査）が2遺跡で、発掘面積の合計は86,784 m² である。このほか、測量調査のみ行った遺跡が1遺跡、整理作業のみ行った遺跡が2遺跡ある。これらの遺跡を地域別にみると、北は深川市、南は今金町で、他は道央地域に集中している。

次に、調査の成果を年代順にふれてみる。縄文時代早期の遺跡としては美沢3、納内6丁目付近、モンガクFなどの遺跡がある。納内6丁目付近遺跡の礫層から東釧路Ⅱ式土器を含む資料が比較的まとまって出土している。これまで道央地域で出土例が少なく実態のよくわからない土器であったが、編年や分布を研究する上で貴重な資料になろう。美沢3遺跡からは東釧路Ⅳ式期の住居跡が11軒まとまって発見された。この時期の集落のあり方を示すものとして興味深い。また、土壙内から2点の足型付土版が発見された。これは、昭和53年に続いて3・4例目で、所属時期の問題に決着をつけた感がある。

前・中期の遺跡としては、美沢3、納内3、納内6丁目付近遺跡などがある。美沢3遺跡から前期初頭の花積下層式類似の土器が、結束のない羽状縄文土器と一緒に出土している。納内3、納内6丁目付近遺跡では前期後半から中期前半に位置づけられると思われる押型文・押引文・刺突文などの文様要素を持つ土器が出土している。平底押型文土器群の実態を解明する上で好資料といえる。後期の遺跡としては、整理作業のみ行った忍路土場遺跡がある。各種分析・鑑定結果が出され、古地形・古環境の復元により、遺跡の性格づけが明らかにされたこと、植物の栽培の可能性が出てきたこと、木製品の中で構造材が多いこと、道内でも漆液の採取が行われ漆器の製作が行われていた可能性が強いことなど多くのことが分かりつつある。

晩期では、栄町5遺跡で千歳市ママチ遺跡に近い時期の土壙墓、土壙が発見されている。土壙墓から矢柄研磨器・石斧・黒曜石棒状原石など特長ある副葬品が出土している。東広里遺跡からは擦文時代中頃の住居跡が6軒発見されていて、そのうち1軒から炭化米が出土している。道内では3例目である。近世～近代の砂金採掘跡の記録調査が美利河1砂金採掘跡で行われた。本道の砂金採掘史を考える上で貴重な資料となろう。

このほか、調査事業ではないが、全国埋文協の研修会が本道を会場に開催されたのでふれておく。全国から118名の参加があり、3日間の日程で、札幌・余市・千歳・白老・深川・旭川を会場に開かれた。東海大学岡田淳子教授の「北海道文化の形成について」の講演や史跡、民俗芸能、発掘現場視察など、多彩な研修内容で行われた。

昭和63年度調査一覧

遺跡名	所在地	調査面積 m²	関連工事 調査委託者	備考
美沢 3	苫小牧市	17,464	新千歳空港 北海道開発局（札幌）	昭和51、55年度に続く第3次調査
美利河1 砂金採掘跡	瀬棚郡 今金町	110,166	美利河ダム 北海道開発局（函館）	〔測量調査〕 昭和57年度の美利河2砂金採掘跡に続く第2次調査
東広里	深川市	1,540	音江築堤 北海道開発局（石狩川）	昭和62年度より継続調査
モンガクA	余市郡 仁木町	2,460	広域営農団地 北海道後志支庁	整理作業は平成元年度まで
モンガクB	〃	3,630	〃	〃
モンガクF	〃	730	〃	〃
栄町 5	余市郡 余市町	4,191	〃	〃
忍路土場	小樽市	—	〃	昭和60～62年度発掘 今年度は整理作業のみ
忍路 5	〃	—	〃	昭和62年度発掘 今年度は整理作業のみ
西野幌12	江別市	943	総合運動公園 北海道住宅都市部	昭和57年度より継続調査
納内 6丁目付近	深川市	8,540	北海道縦貫自動車道 日本道路公団（札幌）	昭和62年度より継続調査
国見 2	〃	5,000	〃	昭和61年度より継続調査
納内 3	〃	40,253	〃	昭和62年度より継続調査
牛舎川右岸	伊達市	1,265	〃	事前発掘調査（試掘）
牛舎川左岸	〃	768	〃	〃

1　調査の概要

美沢3遺跡（J－02－81）

事 業 名：新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局札幌開発建設部

所 在 地：苫小牧市美沢164番地10ほか

調査面積：17,464 m²（昭和55年度：3,480 m²）

発掘期間：昭和63年5月9日～10月28日

調 査 員：大沼忠春、遠藤香澄、佐川俊一、皆川洋一、長沼　孝、前田正憲、森岡健二

遺跡の概要

美沢3遺跡は、美沢川右岸の標高20 mの台地上から7 mの低位段丘の縁辺、水際近くにまで広がっている。昭和51年度（北海道教育委員会）と同55年度に一部の調査が行なわれており、本年度は第3次の調査にあたる。本年度調査地区の大部分は段丘縁辺の斜面で、遺構・遺物は下位の平坦面に集中する傾向がある。地層は、表土、Ta－a（火山灰）層、Ta－b（火山灰）層、第1黒色土層、Ta－c（火山灰）層、第2黒色土層の順に堆積していて、遺構・遺物は、表土に近代の炭焼窯などがみとめられたほかは、第Ⅰ黒色土層と第Ⅱ黒色土層に包含されていた。第Ⅰ黒色土層には、続縄文時代初頭から擦文時代を経て、中世の頃までの遺物と、焼土、礫群などがみとめられ、第Ⅱ黒色土層からは、縄文時代早期から後期の土壙、住居跡、Tピット、土器、石器、土・石製品が出土している。このうち検出量が多いのは、縄文時代早期の遺構・遺物である。

本年度の調査では、縄文時代中期の住居跡や早期の住居跡・土壙などが発掘され、遺物にも石刃鏃など従来例を見なかったものが出土した。

遺構と遺物

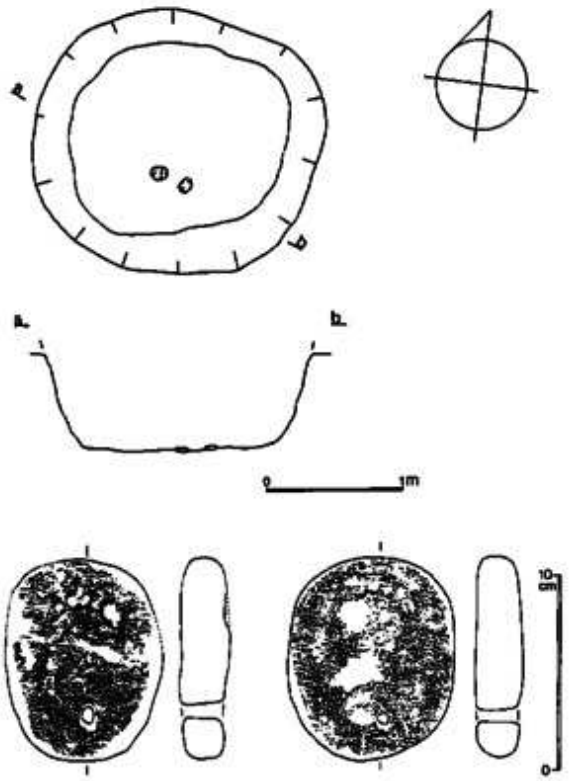
縄文時代早・前期の遺構・遺物のうち、特記されるものには石刃鏃、足形付土版、住居跡、前期初頭の土器などがある。石刃鏃は美沢川流域の遺跡群をはじめ、道央の石狩、胆振地方で発見されている。とくに日高地方では出土例が多く、この地方を通じて道東地方の人々が、道央地方にもかかわりをもっていたことが考えられる。なお、石刃鏃の製作の場を示すコアやブレイドはみとめられなかった。今後隣接する地区の調査も予定されており、そのあり方が確認されるかも知れない。

遺跡の位置

足形付土版は、道内では新千歳空港建設用地の美々5遺跡ではじめて出土したものが知られていた。これは包含層と土壙との内部の2ヵ所から出土したもので、いずれも破損していた。本年度の調査で出土したものは2個で、土壙底面から足形のある面を下にして検出された。1個には左の足形、他の1個には右の足形が付けられていたので、2個一対になると思われるほぼ完形のものである。出土状態が明らかになったことと、その時期が早期にさかのぼることが確実になった点で、改めてこの種の遺物のもつ意味が問題となるであろう。これを出土した土壙は墓と考えられる。

11軒の住居址の覆土と床面から東釧路Ⅳ式土器が出土しており、縄文時代早期の遺構であることが明らかとなった。これらの住居址には壁に沿って小柱穴が並び、その数も10個～50個と様々である。このような住居跡がまとまって検出されたことは、この時期の一般的な住居跡の様子をなすものとも考えられ、今後の調査の参考となるであろう。住居址内の施設としては小ピットがあり、ここから焼土塊が出土している。また床とみなされる位置に台石が置かれていて、その住居での生活の一端を示しているものもある。

前期初頭の遺物は比較的小範囲にまとまっており、分布は未調査地区へ延びているとみられるが、従来共伴するとみなされていた一般的な綱文土器がなく、今回、出土した結束のない羽状縄文を主体とするグループが存在することも考えられる。今後の調査によってその実態が明らかになる可能性があろう。

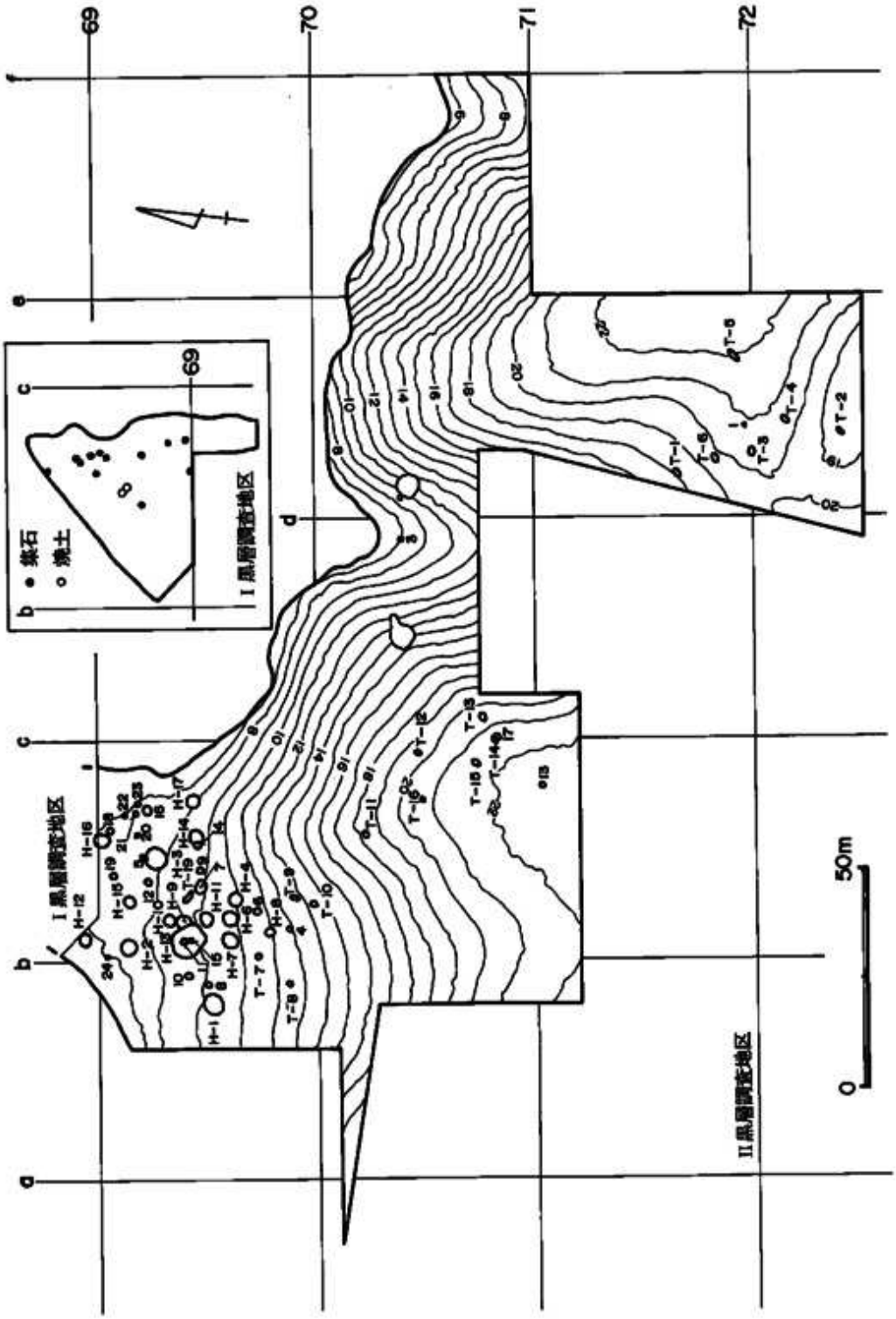


P—16と足形付土版

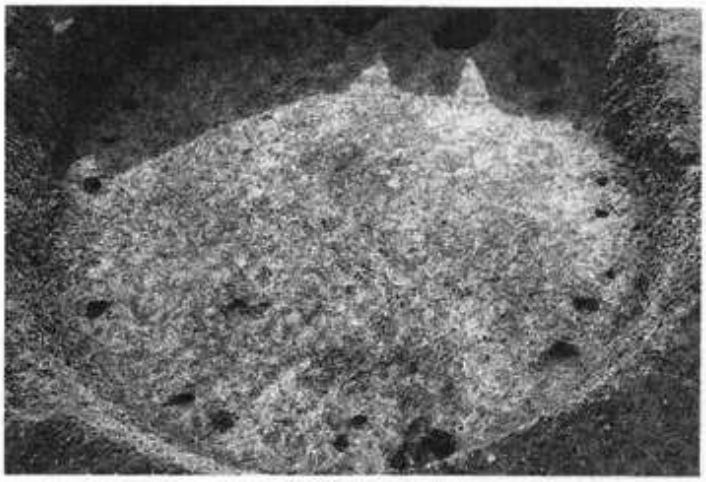
他に中期前葉の大、小2軒の住居跡、後期初頭頃の楕円形プランの住居跡もみとめられ、とくに後期の住居跡には、柱や屋根材とみなされる炭化物が床面から検出された。この住居跡では中央に炉、少し横の位置に皿状のピットが検出されている。

Tピットは溝状のものと小判型のものがあり、後者は2列みとめられた。

後期中葉頃の住居跡は昭和51年に1軒検出されていたが、本年はさらに2軒発掘された。時期は[illegible]式土器の新しい段階に相当するものとみられる。



遺構位置図（コンターは Ta—d_2 層上面）



竪穴住居跡　H－9

H－9　柱穴断面

土壙　P－16

P－16　土版出土状況

I 黒層調査後の状況

集石（I 黒層）

土器の出土状況（I 黒層）

美利河1砂金採掘跡 (C－10－14)

事 業 名：後志利別川水系美利河ダム建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局函館開発建設部

所 在 地：瀬棚郡今金町字美利河58－1ほか

調査面積：110,166 m²（測量調査）

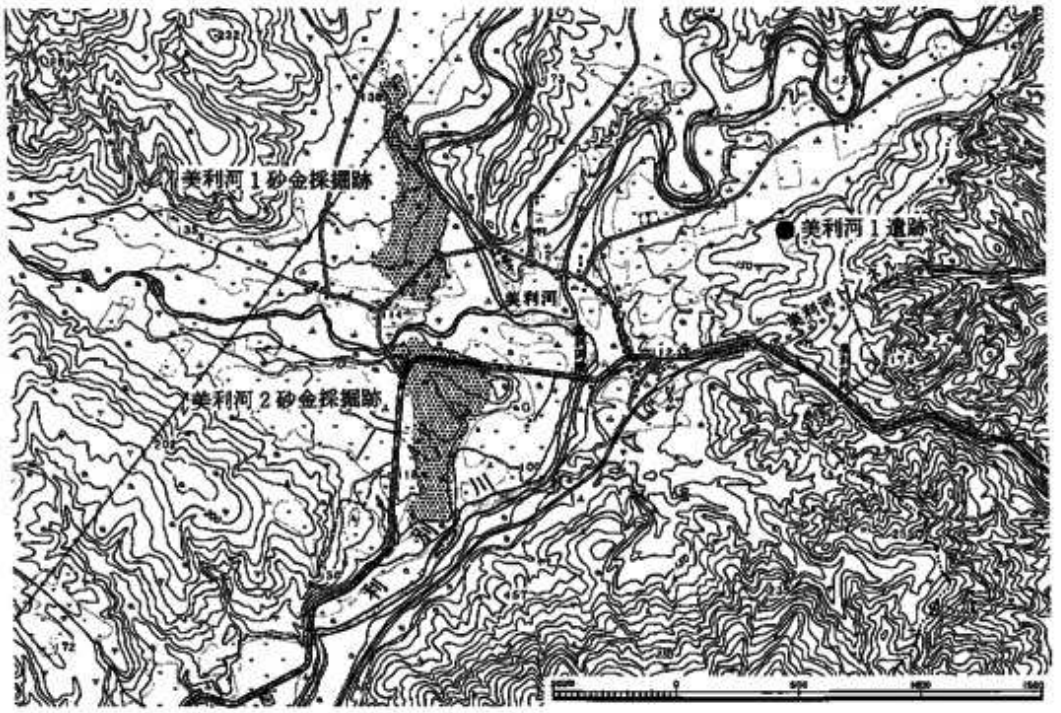
測量調査期間：昭和63年5月9日～6月20日

調 査 員：長沼　孝

遺跡の概要

遺跡の所在する今金町は、桧山支庁管内の北端にあり、長万部町、北桧山町、八雲町、島牧村の4町村に囲まれ、渡島半島第一の長流、後志利別川が町内を東から西に貫流している。美利河地区は町の東北端にあり、後志利別川にピリカベツ川、チュウシベツ川が合流する通称三股と呼ばれるところで、現在多目的ダムの建設が進められている。

ピリカベツ川左岸の長万部町と接する段丘上には、大規模な旧石器時代の遺跡（美利河1遺跡）が発見され、また、後志利別川とチュウシベツ川の両岸には江戸時代の砂金採掘跡とみられる溝や石垣が多数残されている。ダム工事にともない、それらのうち美利河1遺跡の一部、美利河2砂金採掘跡の一部はすでに当センターが調査を実施しており、今回の当遺跡の調査は昭和56年度の美利河2砂金採掘跡の調査と一連のものである。

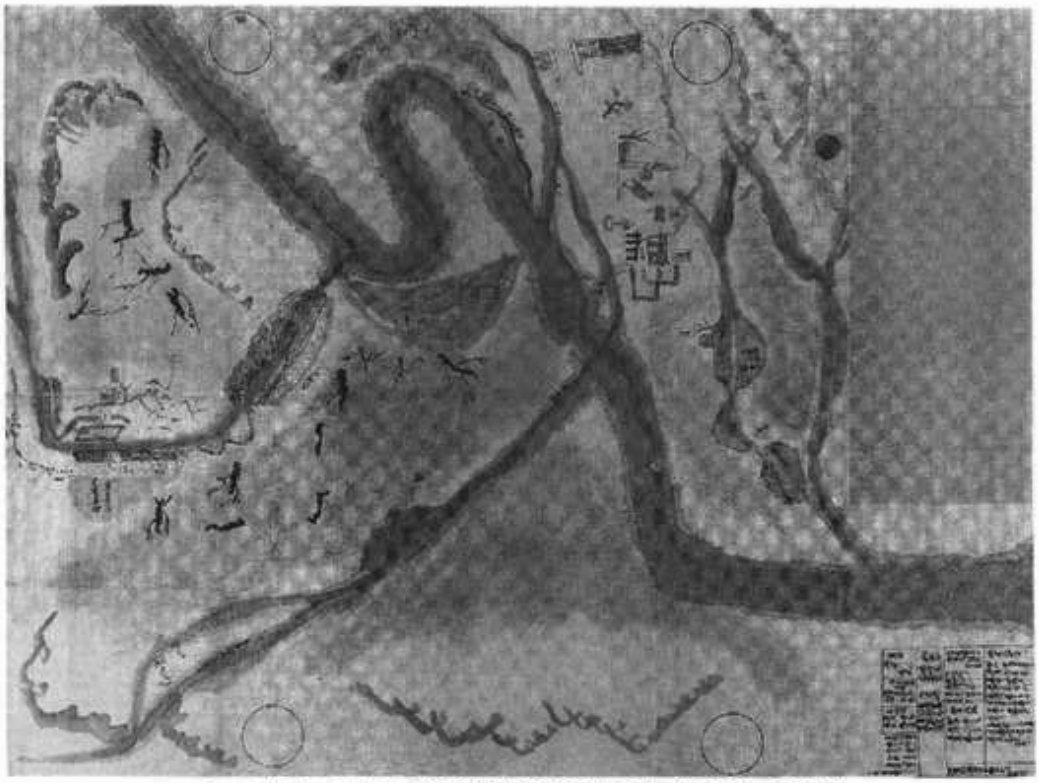


遺跡の位置

遺　構

遺構とみられるものは、砂金の採取場(稼ぎ場)、水路、石垣、石積などで、それらの状況からこの地域では「流し掘り」と呼ばれる方法で砂金採取が行なわれていたらしい。水路は底幅0.5～2m、深さ0.1～2.5mとさまざまの大きさで、採取場へ水を導くものと、採取場から砂礫を洗い流した水を流すものとがみられる。石垣は水路に沿ってつくられているが、高さは0.3～1.5mとさまざまで、石の段も一様ではない。石積は採取場や水路部分の大型の礫を掘り上げて堆積したもので、高さ、大きさともまちまちであるが、場所によっては高さ2.5mにもおよび、外見上三段になっている部分もある。

後志利別川で採取された砂金は「クンヌイ砂金」と呼ばれ、寛永年間（1624～1643）頃から採取されていたらしいが、詳しくは不明である。松前藩は、積極的に各地の砂金山の開発を行ない、延宝5(1677)年頃には国縫、夕張などの砂金を掘り尽くしたとも言われ、安政4(1857)年にここを訪れた松浦武四郎も、かつて砂金を採った水路や石垣のみが残っている、と記録している。しかし、万延元（1860）年には箱館奉行によって砂金山の再開発が行なわれ、佐渡西三川の砂金掘りの職人5名が招かれている。彼らが残したとみられる絵図には利別川、ピリカベツ川、チュウシベツ川のほか役所、採取場、石垣などが克明に描かれ、大規模な採掘が行なわれたことがうかがわれる。しかし、採算が合わず翌年には中止されたらしく、その後は外国人による調査も行なわれるが、大規模な採掘はされていない。



クンヌ井砂金山絵図（新潟県佐渡郡真野町西三川笹川区会所蔵）

A地区遠景

A地区航空写真

A地区水路

B地区近景

B地区水路・石垣

B地区水路・石垣

東広里遺跡 (E－10－19)

事 業 名：音江築堤工事用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道開発局石狩川開発建設部

所 在 地：深川市音江町字広里19－9ほか

調査面積：1,540 m²（昭和62年度：1,429 m²）

発掘期間：昭和63年7月4日～8月19日

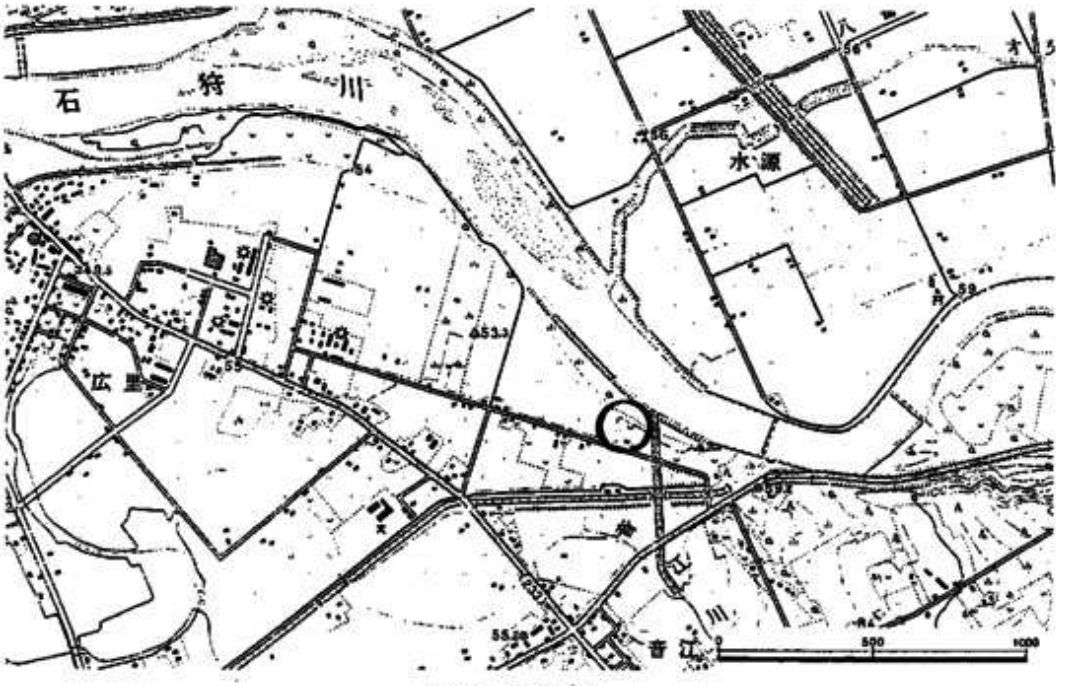
調 査 員：鬼柳　彰、森　秀之、中田裕香

遺跡の概要

東広里遺跡は深川市南部を西流する石狩川左岸の平地に所在している。遺跡の南方には幌内山地中央に位置するイルムケップ火山がそびえ、この山に源をもつ音江川が調査区のすぐ東側をとおって石狩川に合流している。

本遺跡の所在は古くから知られている。北海道の考古、人類学の先駆者として知られる高畑宜一が明治27年、『東京人類学会雑誌』に発表した「石狩川沿岸穴居人種遺跡」や、大正7年の『北海道史――附録地図』によると、本遺跡には当時、30個以上の竪穴のくぼみがあったという。耕地の均平化が進んだ現在では、これらのくぼみは削平されたり、埋めたてられており地表にみることはできない。

今回調査した所は、本遺跡のうち築堤本体工事部分で、石狩川岸から約100 mはなれている。調査区の総面積は2,969 m²。このうち西半の1,429 m²については、昭和62年度に発掘を実



遺跡の位置

施、今年度は東半 1,540 m² の発掘を行った。

遺構と遺物

今回の調査によって本遺跡からは、竪穴住居跡 8 軒、掘立柱跡 1 ヵ所、焼土 9 ヵ所のほか河道跡が 2 条発掘され、これらに伴って 5,200 点あまりの遺物が出土した。遺構はいずれも縄文時代のもので、河道跡は同時期に上流から運ばれる砂によって埋まりつつあったとみられる自然の流路である。

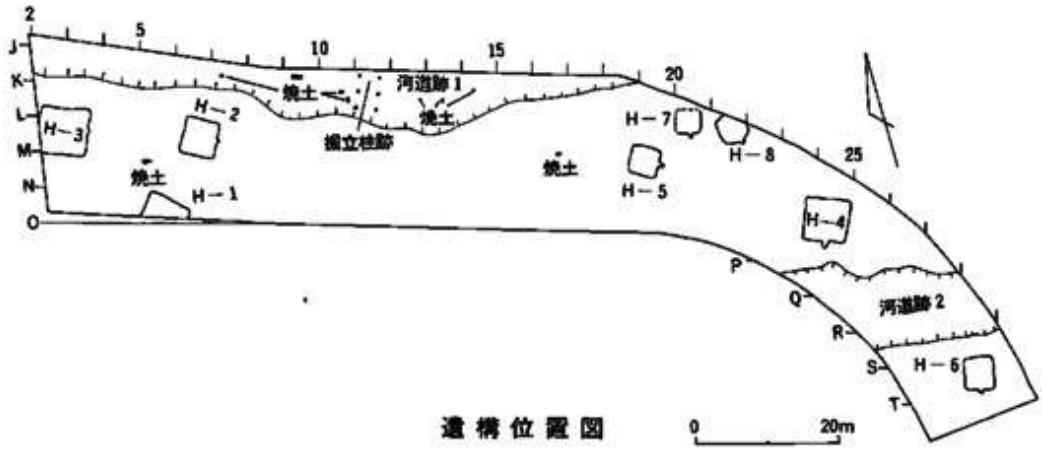
竪穴住居跡のうち 7 軒は 2 条の河道跡の間に分布しており、1 軒のみがこれの南側にある。住居跡は H—8 が五角形状を呈するが、ほかは方形で 1 辺約 8 m のものが 2 軒、ほかの 6 軒は 3〜4 m ほどである。南半部が調査区外にかかる住居跡 H—1 を除く 7 軒には、東あるいは南壁につくりつけられたカマドが検出された。柱穴も 2 軒を除いて確認されたが、とくに H—3・H—4 の柱穴は深さ 1 m 前後に及び、柱痕の観察から柱には角材を使用したことが判明した。また、H—3 からは炭化材が多数検出されている。

調査区は全域にわたって造田や耕作により、V 層（砂）ないしVII層（地山）まで削平されているが、河道内には堆積土層が良好に残されていた。遺物包含層はIV層（黒色土）とVI層（黒褐色土）で、河道跡ではこの間に砂が厚く堆積している。このうちIV層からは多数の遺物が出土したが、VI層ではわずかである。北側の河道跡ではIV層中に焼土が 7 ヵ所みつかったほか、IV層除去後砂層上面に掘立柱のピット列を検出した。焼土は住居跡がある平坦部にも 2 ヵ所あるが、これは削平された住居跡のカマドの可能性がある。

出土した遺物には、大小の甕・杯形土器、紡錘車、鉄斧・刀子などの鉄器、銅製品の破片、琥珀原石のほか、集中して出土した拳大の長円礫・タタキ石・砥石、黒曜石や珪岩の剥片、耕作土からみつかった須恵器片などがある。

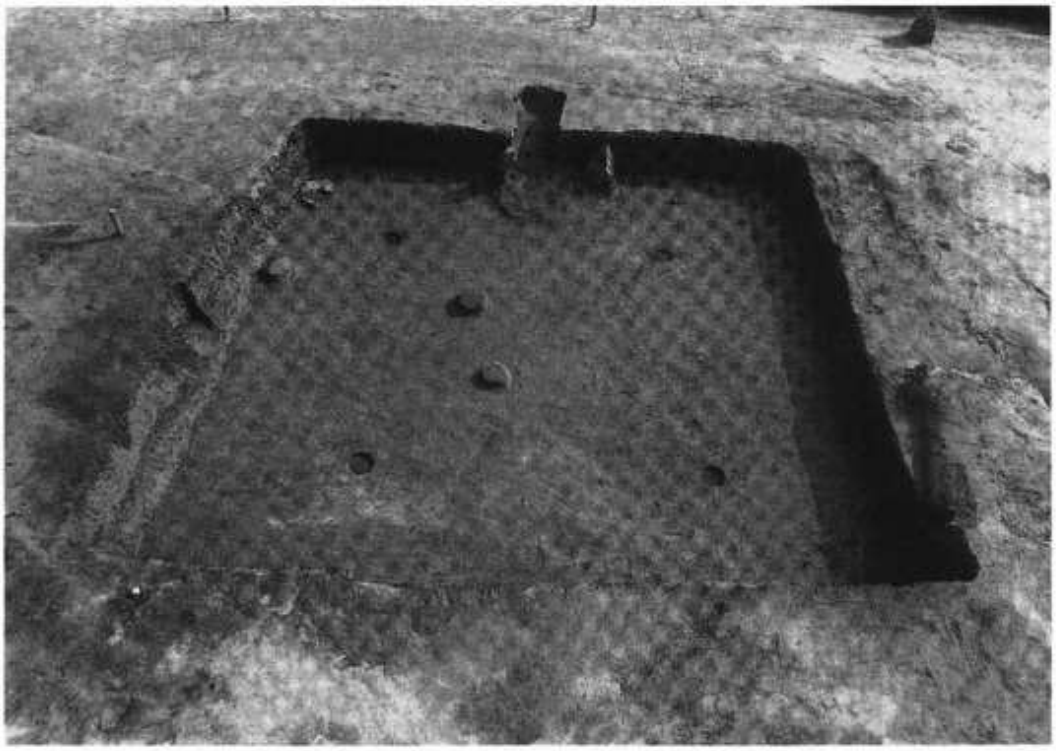
これらの遺物は、土器の文様・器形等から判断すると、縄文時代中頃のものが主体と考えられる。

土壌水洗あるいはフローテーションによって、焼土中からは魚類の骨片が検出され、住居跡 H—5 の覆土中からは、炭化米が 11 粒発見された。



遺構位置図

竪穴住居跡Ｈ―6と河道跡



竪穴住居跡Ｈ―4

H—6 遺物出土状況

甕形土器

甕形土器

モンガクＡ遺跡（D－18－4）・モンガクＢ遺跡（D－18－5）・モンガクＦ遺跡（D－18－9）

事 業 名：北後志東部地区外１地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道後志支庁

所在地・調査面積：モンガクＡ遺跡　余市郡仁木町東町12丁目73番地ほか　2,460 m²

モンガクＢ遺跡　余市郡仁木町東町10丁目25番地ほか　3,630 m²

モンガクＦ遺跡　余市郡仁木町東町12丁目90番地ほか　730 m²

発掘期間：昭和63年5月9日～昭和63年6月30日

調 査 員：種市幸生、田才雅彦、三浦正人、田口　尚、工藤義衛

モンガクの遺跡群

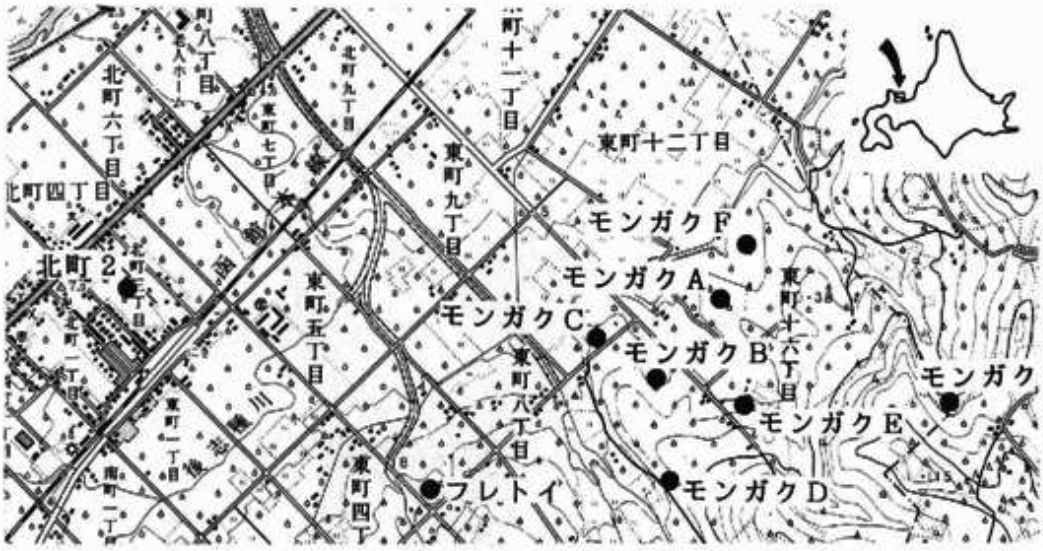
モンガク遺跡群の位置するモンガク丘陵は、仁木町の西側に広がる赤井川カルデラの外輪山からのびる台地の一つである。モンガクという地名は『仁木町旧地名録』（久保武夫編　1983）によれば、旧赤井川道路の追分から丘陵に流れでる沢の名で、アイヌ語の〝ムンカクウス〟ないし〝ムンカルシナイ〟が訛ったものと推測されている。ムンカルシナイは、ムン（草の）、カルシ（通行する、通過する）、ナイ（川）で、草の生い繁ったところを流れる谷川を表す地名と解され、ヨシ、スゲ、ガマ等の草刈り場であったらしい。

モンガク丘陵の遺跡は、現在７カ所（仁木側）が確認されているが、その存在は比較的古くから知られており、明治末から大正にかけて記された『河野常吉ノート』（宇田川洋校註 1981）に現在のモンガクＡ、モンガクＢ遺跡を指すと思われる記述がある。

モンガクＡ遺跡

遺跡の概要

本遺跡は、モンガクの沢の南側、仁木平野に向かってのびる指状の台地に位置しており、今

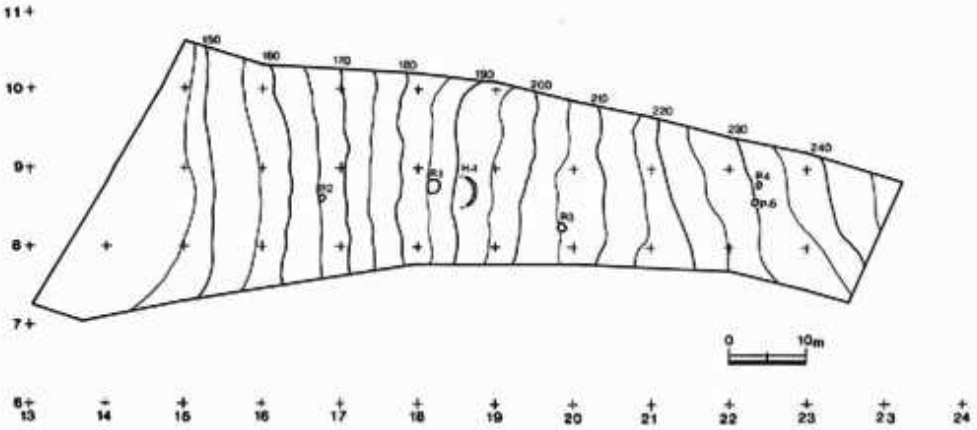


モンガクＡ・Ｂ・Ｆ遺跡と周辺の遺跡

回は台地の平坦部から沢の一部を含む北側の斜面を調査した。発掘区の東側には湧水があり、農業用水に利用されている。台地上からは、北にシリパ岬、南に沢一つおいてモンガクB遺跡を望むことができ、沢の北側の台地の縁辺部には、今回調査を行ったモンガクF遺跡が所在する。包含層は、長年の耕作と整地によってかなり動かされており、遺物の磨耗が甚だしい。

遺構と遺物

確認した遺構は、土壙5基、住居跡1軒である。18—9区で検出された住居跡からは、縄文時代中期末葉の北筒式土器が出土している。遺物は15,209点出土、このうち土器は1,206点、石器が14,003点で、縄文時代中期のものがもっとも多く、そのほか早期、後期の遺物も出土している。



遺構位置図

遺跡遠景

竪穴住居跡H－1

調　査　状　況

調　査　状　況

モンガクB遺跡

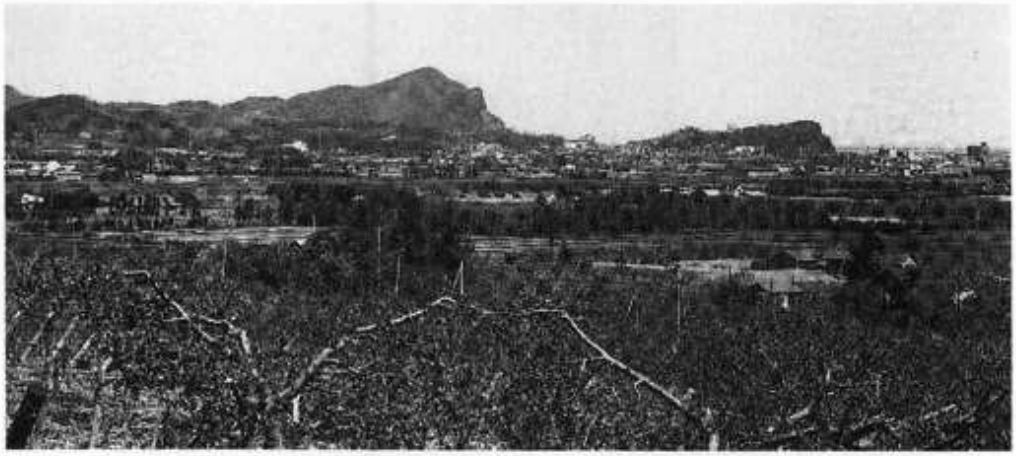
遺跡の概要

本遺跡は、モンガクA・F遺跡から小沢を一つ隔てた南側、冷水川右岸に沿って伸びる舌状台地の先端部付近に位置する。遺跡の主体部は、今回の調査地点を南西側に少し上がった部分にある。台地の下には湧水を中心とした広がりをもつモンガクC遺跡が所在する。遺跡の上に立つと、眼下に余市川によって開かれた平地が広がり、北側にはシリパ岬がその威容を誇っている。

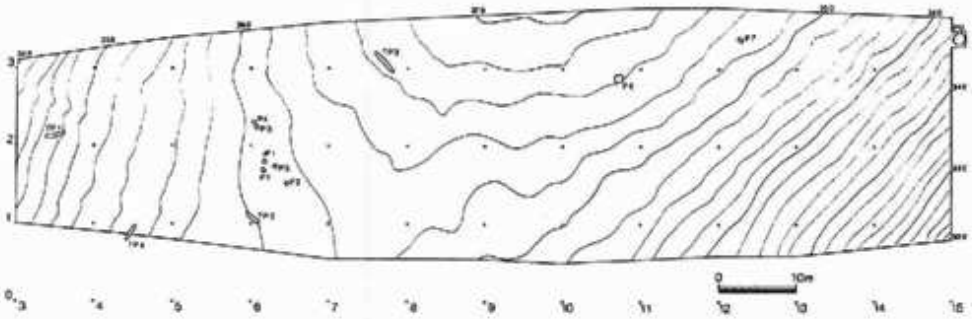
調査は、包含層が耕作によって大きく攪乱されていたため、遺物の収集と遺構確認を主眼とした。

遺構と遺物

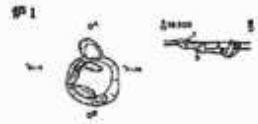
確認した遺構は、石組炉1基、土壙8基、Tピット4基で、遺物は49,429点を得たが、このうち土器はわずかに625点を数えるのみである。主体となるのは縄文時代中期の遺物で、後期のものも若干ある。なお、8—1区周辺で続縄文時代後北期の土器がまとまって出土している。石器等は48,804点出土しているが、その大半が剥片で石器はこのうち335点に過ぎない。なお、旧石器時代の細石核、細石刃などが11点得られている。



遺跡からの眺望

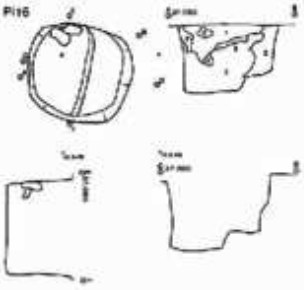


遺構位置図



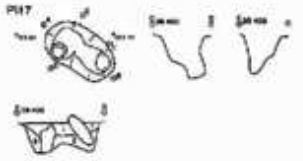
炉1　石が幾つか抜けているが、方形に配されている。横に浅いピットをもち、その中に焼土が溜っている。

1　赤褐色焼土　1　焼土を若干含む暗褐色土(Ⅲ層)　2　黒褐色土(Ⅱ層)　3　ローム粒を若干含む暗褐色土（Ⅲ層・埋土）



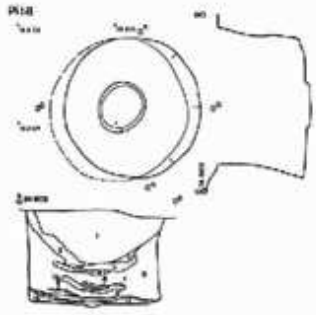
pit 6　方形に近い平面形を有する。壙底部は二段になっている。出土遺物は、壁際に礫が2点見られただけである。土層の状況は、炭化物を含む暗褐色土の中に黒褐色土が斑状に見られる。自然堆積ではなく人為的に埋め戻された可能性が強い。

1　ローム粒を若干含む黒褐色土（Ⅱ層）　2　黒褐色土（Ⅱ・Ⅲ＞Ⅳ層）　3　炭化物を含む暗褐色土（Ⅱ・Ⅲ＝Ⅳ）



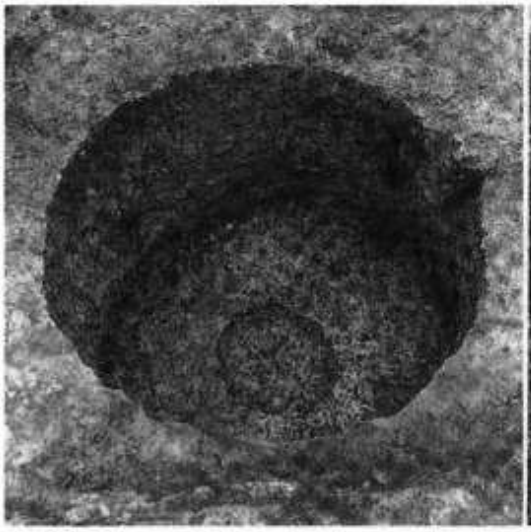
pit 7　長さ50 cmを超す大型の礫2個を立てた土壙である。伴出遺物がないため時期を特定できないが、ストーンサークルに関連する施設とも考えられる。

1　ローム粒を若干含む黒褐色土（Ⅱ層）　2　暗褐色土（Ⅲ－Ⅳ層）



pit 8　いわゆるフラスコ状ピットで、壙底中央に浅い小ピットをもつ。

1　ローム粒を含む黒褐色土（Ⅱ層）　2　暗褐色土（Ⅲ＞Ⅱ・Ⅳ層）　3　黄褐色土（Ⅳ＞Ⅱ・Ⅲ層）　4　ローム粒を含む暗褐色土（Ⅱ・Ⅲ層）　5　暗黄褐色ローム（Ⅳ＞Ⅲ・Ⅴ）　6　暗褐色粘質土（Ⅲ層）　7　炭化物を含む暗褐色土（Ⅱ・Ⅲ＞Ⅳ層）　8　炭化物を含む黒褐色土（Ⅱ層）　9　炭化物・ローム粒を含む黒褐色土（Ⅱ層）　10　灰褐色ローム（Ⅳ・Ⅴ層）　11　暗黄褐色粘質土（Ⅱ・Ⅲ＞Ⅳ・Ⅴ層）



土壙　P－8

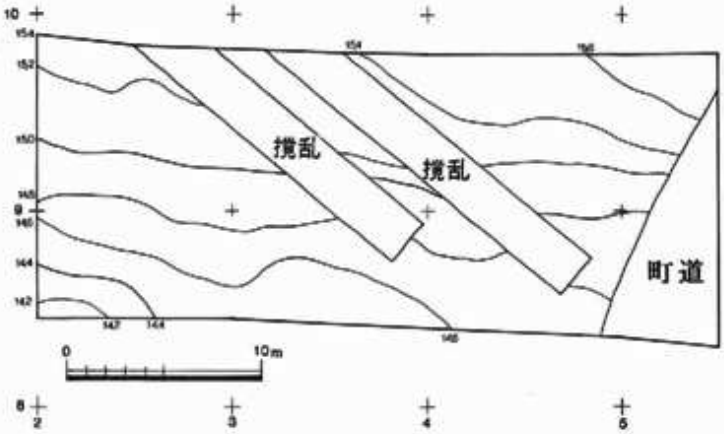
石囲い炉

モンガクＦ遺跡

遺跡と遺物の概要

本遺跡は、モンガクの沢の北側、丘陵先端のゆるい傾斜地に位置しており仁木平野の北半分を見渡すことができる。沢をはさんで南側にはモンガクＡ遺跡が位置している。調査前は果樹園として利用されていたため包含層が著しく攪乱を受けていた。

本遺跡からは遺構は検出されなかった。遺物は3,555点出土、このうち土器は235点、石器が3,320点である。土器は、縄文時代早期の東釧路Ⅲ式がほとんどを占めており、石器もこれに伴うものと思われる。特徴的な石器としては、重量500g～750gの大型の石錘がある。



調査後の地形

調査後の状況

栄町5遺跡 (D－19－48)

事 業 名：北後志東部地区外1地区道営広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道後志支庁

所 在 地：余市郡余市町栄町550－2

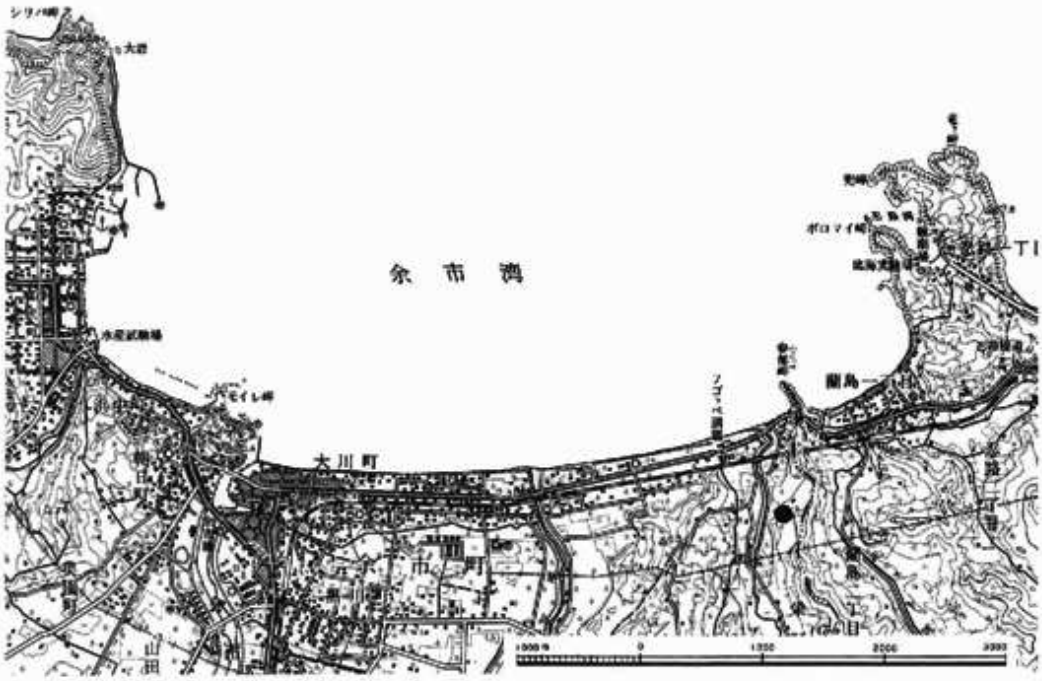
発掘面積：4,191 m²

発掘期間：昭和63年6月20日～10月25日

調 査 員：長沼　孝、前田正憲、森岡健治

遺跡の概要

遺跡の所在する余市町は後志支庁管内の東部にあり、東は小樽市、南は赤井川村・仁木町、西は古平町に囲まれ、北は日本海に面している。町は西のシリパ岬と東の兜岬に挟まれた余市湾に沿って広がり、遺跡のある栄町は小樽市に接する町の東端に位置している。遺跡の立地する南北にのびた丘陵は、春部（ふごっぺ）川の東側にそってわずかに傾斜して余市湾に突出した春部岬につながっている。また、この丘陵上には縄文時代後期のものとみられるストーンサークルが点在し、その一部は「西崎山ストーンサークル」として、道指定史跡となっている。遺跡の標高は50～57 m、北と南は緩やかに傾斜するが、東は崖で、指定地とは南北方向の沢を挟んで対峙し、独立丘陵に近い状態となっている。ブドウ畑として耕作されていたが、東側の崖以外は大きな地形の改変を受けていないらしい。



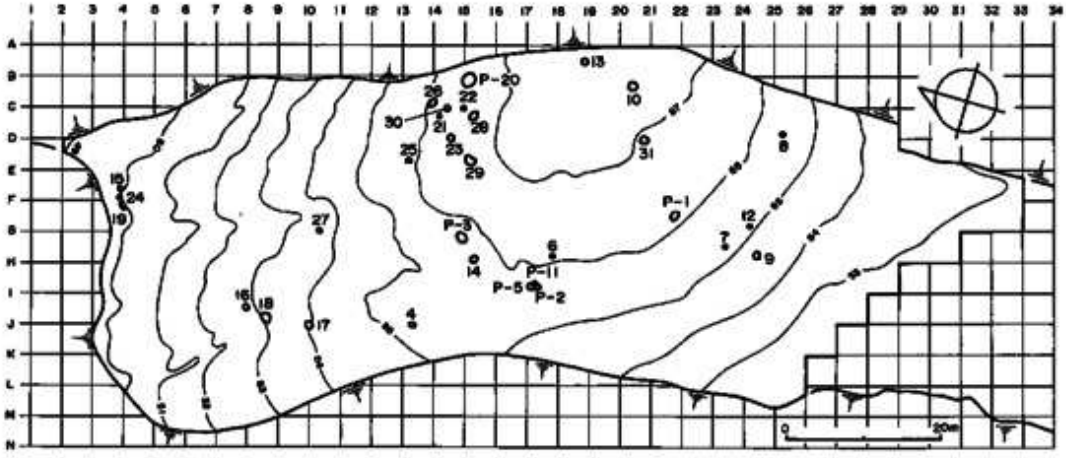
遺 跡 の 位 置

遺構と遺物　確認された遺構は、土壙が31基、そのうち6基が土壙墓と考えられる。土壙墓は平面形が楕円形で、大きさは長径1.4～1.6m、短径1.0～1.4m、深さ0.1～0.3m（上部が削平されているため残存部分は浅い）で、配石などは伴わず、構造は単純である。副葬品は石鏃、スクレイパー、フレイク、石核、黒曜石棒状原石、石斧、石斧原石、たたき石、矢柄研磨器、垂飾などがある。石鏃は有茎のものは少なく、無茎のものが大部分である。スクレイパーは、フレイクの周縁に浅い加工を加えただけのものが多いが、両面加工のナイフも数点みられる。石斧は刃部の断面形から両刃と片刃の二種類に分けることができる。両刃のものは大型で、こう打整形され重量感があり、片方の側面が平坦で、特色ある横断面形をしている。片刃のものは各種のサイズがあり、擦切技法のみられるものもある。矢柄研磨器は軽石（溶結凝灰岩）製で、片面に溝がみられる。

副葬品の出土位置は壙底部より覆土中が多い。人骨はほとんど残存していなかったが、1基だけ歯のエナメル質部分が確認できた。また、ベンガラは2基の壙底部でみられた。以上の墓の特長は、千歳市ママチ遺跡のⅠ黒層の土壙墓と類似している。

墓以外の土壙は、平面形が円形のものが大部分で、覆土中に礫または土器片がまとまってみられるものが多い。まとまって出土している土器片は壺形土器のものが多く、ほぼ完形に近い状態で出土した壺形土器の中には、黒曜石の大型フレイクが4点埋納されていた。

遺物総数は101,846点、内訳は土器73,493点、石器3,393点、フレイク・チップ、礫など24,727点、土・石製品233点で、全体の約7割が土器片である。土器は、おもに耕作土から出土し、細片化しており、全体を復元できるものは少ない。時期は縄文時代晩期のものが大部分で、後期のものが若干みられる。晩期のものは、在地のタンネトウL式系のものが大半で、大洞系のものは少ない。タンネトウL式系の土器は、深鉢、浅鉢、壺などの器形のほか、異形のものも若干みられる。また、文様は平行・弧状・鋸歯状・波状などの沈線文のほか工字文、刺突文などがある。大洞系の土器は少ないが、精良な胎土で、表面に赤色顔料が塗布された壺形



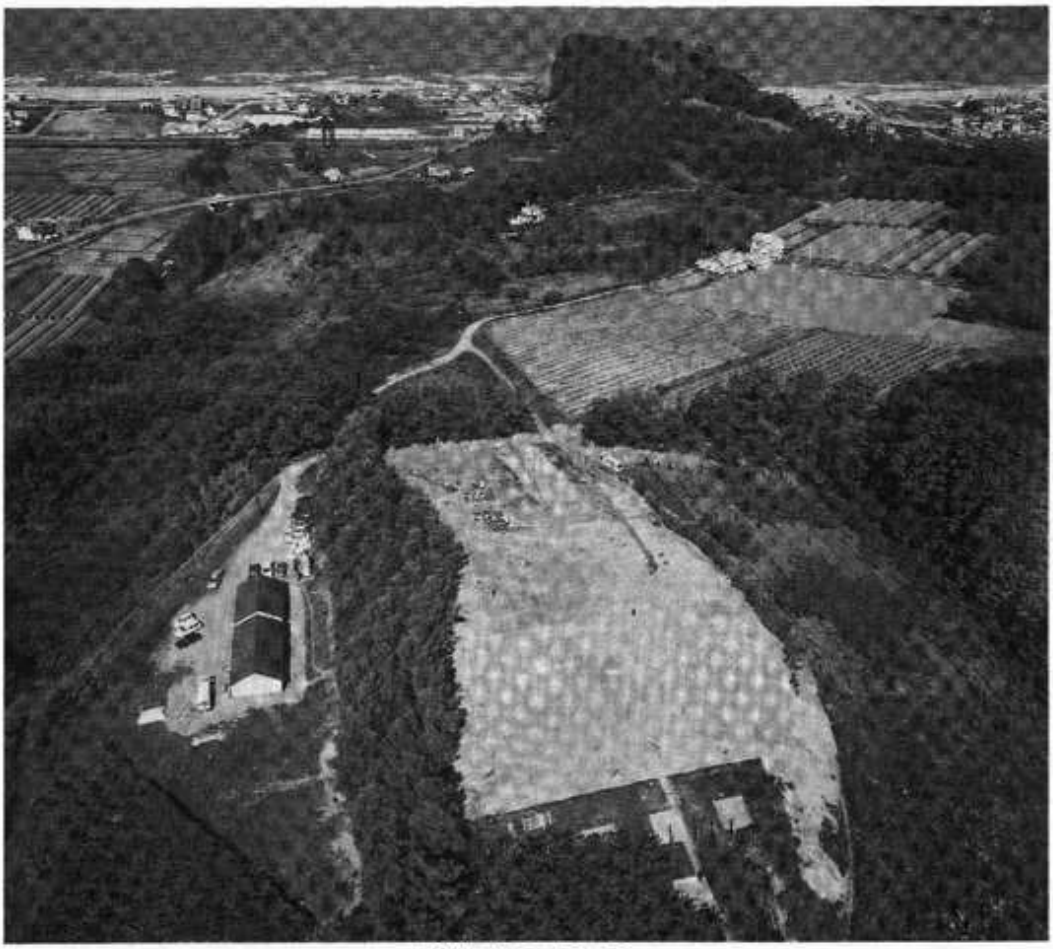
遺構位置図

土器などもある。

石器は石鏃、石錐、やり先またはナイフ、スクレイパー、石斧、たたき石、すり石、砥石、台石、棒状原石、垂飾などがみられるが、剥片石器では、石鏃、スクレイパーが特に多く、礫石器では石斧、たたき石が目立つ。石器に使用されている石材は、剥片石器では黒曜石が多く、ほかに頁岩、めのう、チャート、安山岩など、礫石器では緑色泥岩、片岩、安山岩、珪岩、砂岩、凝灰岩などが使用されている。また、黒曜石は肉眼鑑定によると、赤井川産のほか白滝産のものもかなりの割合で含まれている。

土製品には、大型の土版または土偶と思われるものの破片があるが、全体の形状は不明である。

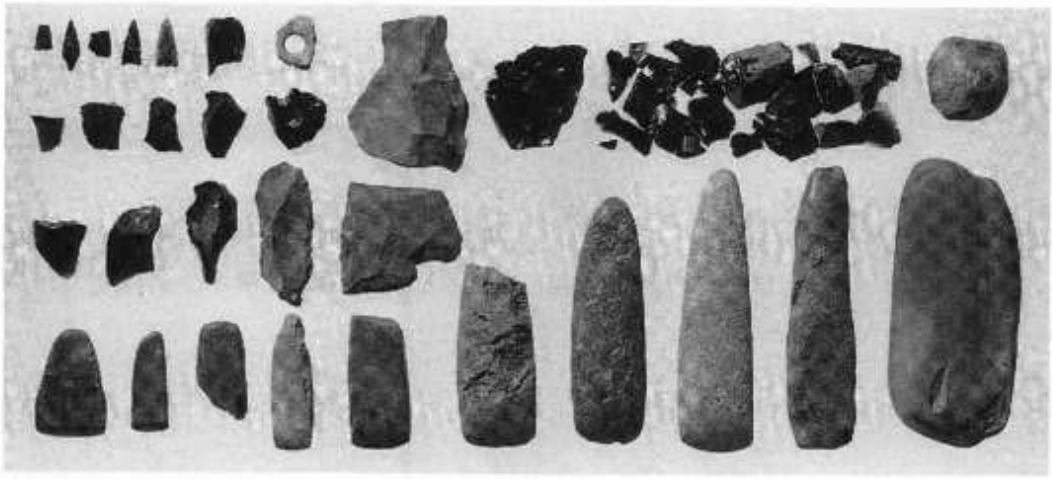
遺構や遺物の内容から判断して、当遺跡は縄文時代晩期終末の墓地および石器の製作場所と考えられる。また、道内においてタンネトウＬ式系の遺構や遺物がまとまって確認された遺跡としては最も西に位置する。



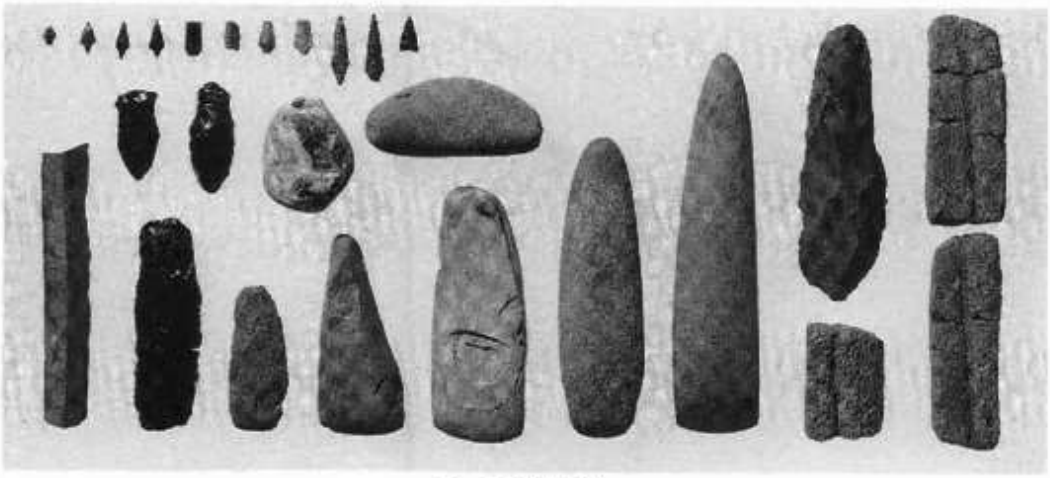
遺跡周辺の航空写真

土壙P－1 遺物出土状況

土壙P－20 遺物出土状況



P－1 出土遺物



P－20 出土遺物

忍路土場遺跡 (D・01・1)

事 業 名：北後志東部地区外1地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道後志支庁

所 在 地：小樽市忍路2丁目196―2ほか

整理期間：昭和63年4月16日～平成元年3月25日(昭和60～62年度発掘　3,949 m²)

調 査 員：種市幸生、高橋和樹、田才雅彦、三浦正人、田口　尚、工藤義衛

遺跡の概要

当遺跡は、小樽市街の西方約10 kmに位置している。調査区は西流して蘭島川に注ぐ小河川、種吉沢川の中流域左岸の台地(標高約18 m)から、この川の氾濫原である低地にまたがっている。

遺跡より約50 m南の緩やかな斜面には、国指定史跡「忍路環状列石」、南西丘陵上には、道指定史跡「地鎮山巨石記念物」がある。さらに西南西約400 mの地点に忍路5遺跡が位置している。

調査範囲は、農道となる台地と低地の境に沿った延長約210 m、幅20 mの細長い地域である。とくに、種吉沢川の側方浸食でできた2カ所の湾入部のうち西側の部分は、上層部を掘り進んだところ、約~~150~~1050 m²にわたる低湿部が広がることが判明した。調査はこの低湿部を中心に、昭和60年度から3カ年にわたって実施した。今年度は、整理及び報告書作成の作業を行った。

遺跡の形成された時期は、主に縄文時代後期中葉、土器形成でいうと手稲式・毟(ぼつけき)潤式・堂林式の時期である。台地上では、住居跡4軒・土壙6基・柱穴7基・焼土等の遺構を確認した。

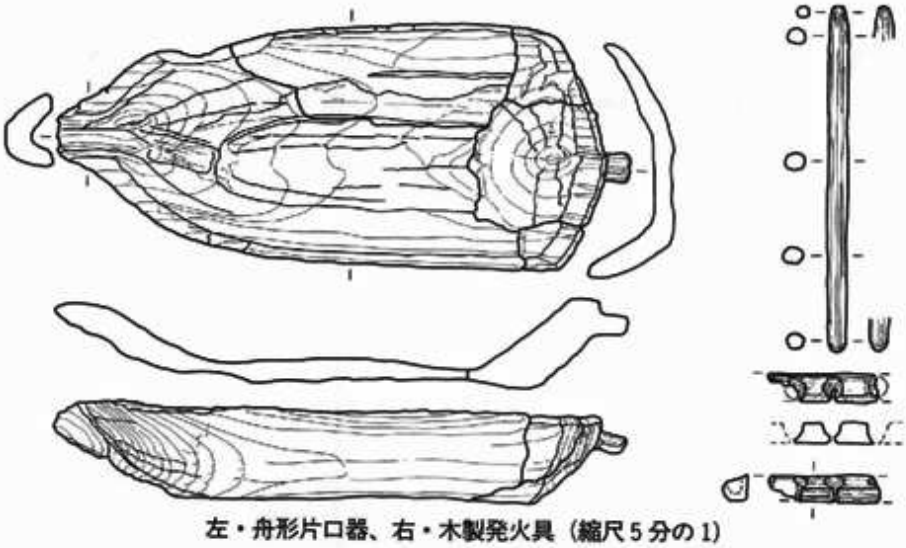
遺構と遺物

低湿部は、厚さ1.5 mほどの礫層の上に黒色腐植泥と青灰色砂が互層となって堆積している。土器・石器・木製品・繊維製品や大量の有機質自然遺物など計約20万点の遺物が発見され、土壌水洗やフローテーションにより、微細な植物種子等も検出されている。地形や層位、遺物分布からみると、手稲式期には低湿部はまだ川が近く、おもに廃棄場として利用されていたも

遺跡の位置

土層と調査状況

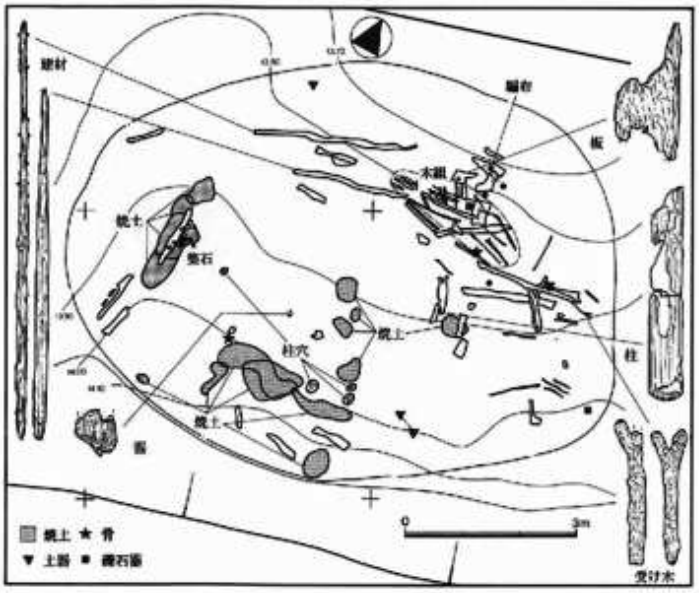
鉈洞式土器セット



左・舟形片口器、右・木製発火具（縮尺５分の１）

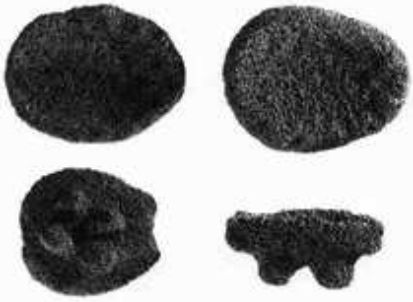
石斧柄（1/5）

のと思われる。しかし、蛇淵式期に入ると、川の氾濫原とした安定した面が広がり、ここが作業場として利用されたこともあったと思われる。調査では7ヵ所の作業場跡を確認した。作業場からは、作業台と推定される木組・土器や木製の容器・石皿等の石器や木製の道具類・加工材・繊維製品・ニシン・ヒラメ・ヒグマ・エゾシカなどの魚獣骨やトチ・クルミ・ハイイヌガヤなどの大型種子・パン状炭化物がみつかり、ここが植物加工を中心とした作業の場として利用されていたことが考えられる。



1号作業場跡

また、柱穴や建材・焼土の存在から、作業小屋のごとき建物があったことも想像できる。弓・やす・たも枠・浮子・筌や魚獣骨からは、狩猟・漁撈活動の一端を知ることができ、また大小の種子と作業場跡や道具類からは、植物採集や加工方法など、当時の生業形態や加工技術を推定できる。発掘された例としては最古のものである木製発火具の発見も重要である。各種木製品や漆塗り製品の製作技術には、目を見張るものがある。木製品や加工素材は仕上げは粗いものの、材の形状や性質をよく生かして、材の選択・木取り・加工を行っている。漆の技術も導入されていたようで、漆を溜めていた土器の破片や樹皮容器のほか、19点の櫛や木胎漆器・赤彩の紐や糸・漆塗り土器などの存在がこれを物語っている。繊維製品も豊富で、縄や糸・ザルカゴ類・編布・目の密な敷物様布やすだれ状製品など、建築・生業から生活一般にわたる幅広い利用がなされていたことがうかがわれる。また組み合わせの推定できる建材（柱・梁材・桁材）の存在は、角材・割材・板・杭とともに、当時の住居や小屋の構造・技法を解明する大き



小型脚付石皿（1/4）

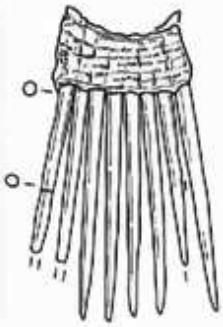
木組（長さ1m92cm）

扶入巨木（長さ 3.88 m）

な手がかりとなる。長さ 3～6 m 径 40～50 cm をはかる大型建材も出土し、台地上の大規模な柱穴の存在と合わせると、住居とはちがった大規模構築物の存在したことがうかがわれ、ストーンサークルやいわゆる「巨木文化」との関係が注目される。これとともに、ヘラ状木製品や男根状木製品・石棒等の石製品・土偶やスタンプ状土製品・櫛・トチノミのネックレス等から、当時の精神文化をかいま見ることができる。土器や石器は、量、器種ともに豊富で、各々セットで把えることができる。土器には、異形台付や吊手付・環状注口・下部単孔・袖珍など特殊な形状のものも多い。また、脚付き土器・石皿・木皿の存在は、材質を異にするが同一形態を示しており興味深い。

縄（1/3）

カ　ゴ（1/3）



漆塗竪櫛（2/5）

トチノミのネックレス（1/4）

忍路5遺跡 (D－01－32)

事 業 名：北後志東部地区外1地区広域営農団地農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道後志支庁

所 在 地：北海道小樽市忍路2丁目205・206番地

整理期間：昭和63年4月16日～平成元年3月25日(昭和60年度発掘　1,763 m²)

調 査 員：田才雅彦

遺跡の概要

本遺跡は、当初段丘面上の遺跡として250 m²が発掘範囲として捉えられていた。しかし、先行する忍路土場遺跡の調査が進むにつれ、低湿地部分にも包蔵地が広がっている可能性が考えられるようになったことから発掘調査に先立って低湿地部分に試掘トレンチを掘開した。その結果、黒色有機質粘土層の存在が確認され、加工痕のある木も出土したため、最終的に1,763 m²の調査面積となった。

本遺跡は、蘭島川と種吉沢川の合流点の下手、海岸砂丘から後背湿地への変換点に所在する。このため、忍路土場遺跡以上に河川の影響を強く受けている。調査区内にみられる二つの大きな湾入部は、いずれも蘭島川の蛇行の跡である。また、調査区東部分には北流して蘭島川に注ぐ無名沢があり、地形と土層を更に複雑にしている。忍路土場遺跡に比して、砂礫層が多く黒色有機質粘土の堆積が少ないのは、こうした河川の度重なる流路変更や氾濫の結果である。

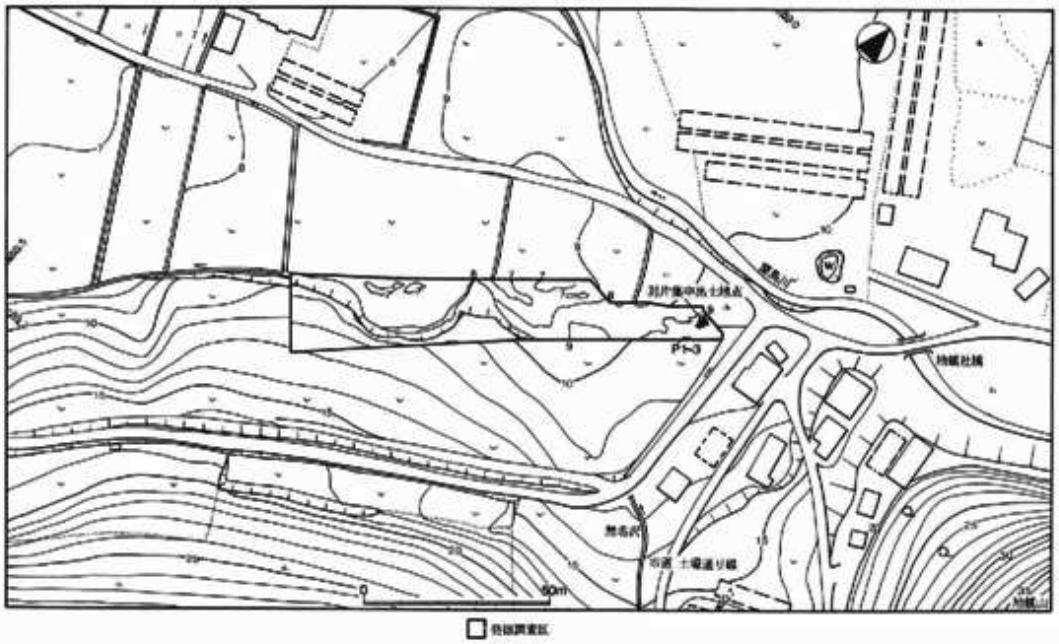
本遺跡の主体部は、無名沢の右岸、市道土場通り線を挟んだ緩斜面にあると思われる。西流する蘭島川を正面北に、ストーンサークルのある地鎮山を東側背後にした位置関係は、種吉沢川と忍路環状列石に対する忍路土場遺跡のそれと同様である。

標高は、忍路土場遺跡の生活面が14 m前後であるのに対し、本遺跡の遺構確認面は9.5 m前後である。

土層はⅠ層からⅧ層に分かれる。本遺跡では忍路土場遺跡のような安定した生活面は捉えられていないが、両者の堆積状況や遺物の在り方から推察すると、本遺跡でⅦa層としたものが、忍路土場遺跡のⅣ層に相当するものと考えられる。忍路土場遺跡では、これ以降の段階でかなり安定した状況が生まれた訳であるが、本遺跡の場合には、その後に蘭島川の流路変更や氾濫の影響を大きく受けたために、生活面が形成され得なかったか、あるいは一時的に形成されたとしても、その後の河川の影響によって押し流されてしまっている。このため、今回の調査区において生活面として捉え得たのは、わずかに標高9 m以上の地点に残されたⅣ層中の遺構面だけである。

遺構と遺物

遺構は10.1区のⅣ層中において検出された3基の小ピットのみである。ピット内から遺物は出土していないが、周辺の出土遺物等から判断して、縄文時代晩期または続縄文時代恵山期のものと考えられる。なお、11.1区のⅣ層中より黒曜石の剥片が集中して出土しているが、これは一括廃棄によるものと考えられる。

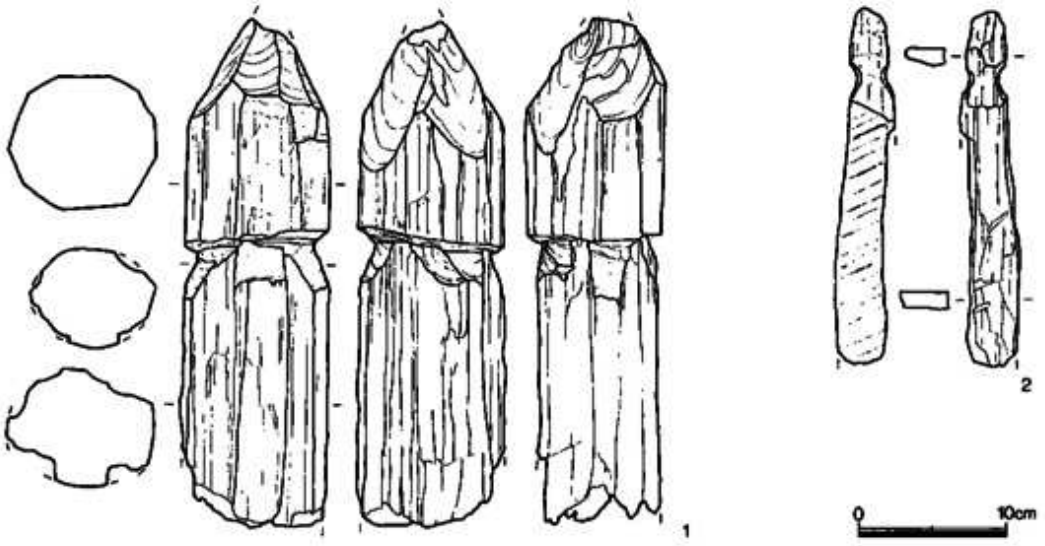


発掘区と周辺の地形

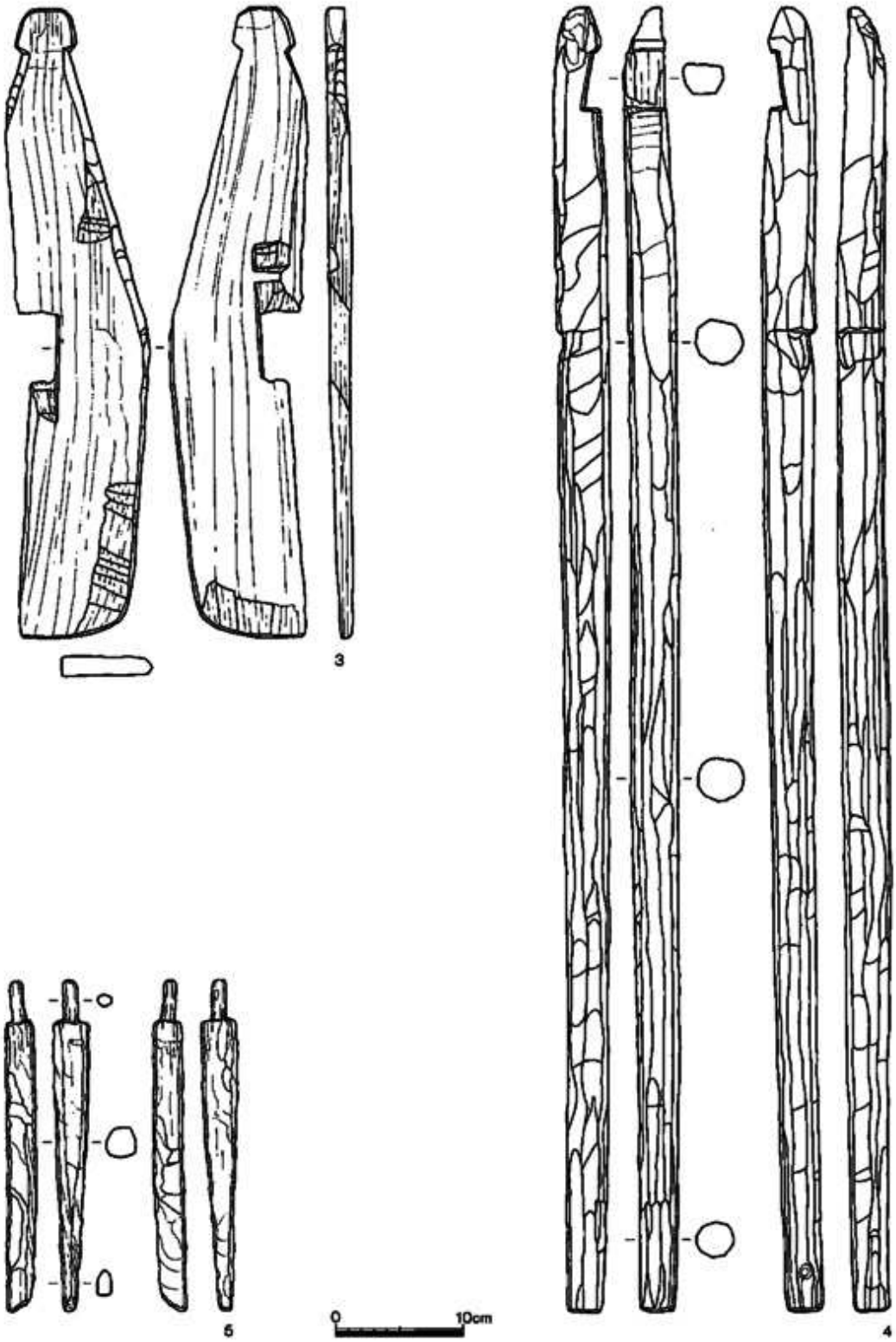
発掘調査風景（調査区西端より）

遺物はすべての層から出土しており全部で5,539点を数えるが、前述したとおり河川の氾濫等の影響でかなり攪乱されており、一部を除き各層毎の時期差は捉えられない。内訳は土器が2,745点、石器等が2,243点、木製品等及び自然木が551点である。土器の時期は縄文時代中期から擦文時代の土師器までがあるが、多くは、縄文時代後期から晩期のものである。木製品等には図示した5点のほかに、板材30点、縦割材16点、杭状材41点などがある。ほかに近・現代の陶磁器片も出土している。図示した木製品のうち3と5は、^{14}C年代測定の結果、開拓期の遺物である可能性が強い。

図1は、エゾマツと思われる針葉樹を素材とした男根状木製品の頭部である。加工にはナタ状の金属器が用いられたものと思われる。図2は人形（ヒトガタ）状の木製品である。図3・4は、一括出土した資料で、鋤状の木製品とその柄と考えられるが、道内にはほかに出土例がなく、また民俗資料にも同形態のものは見られない。3は一側縁を欠くが、中央部に柄を装着するためと思われる穴が斜めに穿たれ、その頭部寄りにも同一角度をもつ切り込みがある。また、先端部から側縁部にかけては使用によると思われる摩耗が見られる。素材はクリの板材で、木取りは板目である。4はヤナギの芯持材を素材とする柄で、最先端部を欠いているが、3の穴に装着するための切り込みと面取りがなされている。両者の装着角度は約15度である。図5は茎（ナカゴ）を持つ刀子状の木製品で、ミズナラを素材としている。



出土木製品(1)



出土木製品(2)

西野幌12遺跡（A－02－106）

事 業 名：道立野幌総合運動公園用地内埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：北海道住宅都市部

所 在 地：江別市西野幌497－12ほか

調査面積：943 m²（昭和57～62年度：29,368 m²）

発掘期間：昭和63年9月2日～10月28日

調 査 員：高橋和樹、谷島由貴、工藤義術

遺跡の概要

道立野幌総合運動公園用地内の遺跡群は、野幌丘陵の東北部に位置している。ここは標高18～30 mの、東にゆるやかに傾斜する台地で、多くの湧水があり小沢により複雑に開析されている。同公園用地内の遺跡は、北東部に西野幌11遺跡、北部に西野幌13遺跡、北西部に下学田遺跡、西部に西野幌14遺跡、中央部南側に西野幌12遺跡、同東側に西野幌15遺跡、南部に西野幌16遺跡がある。

本遺跡は登載当初、西野幌12遺跡と西野幌17遺跡の二つに分かれていた。昭和58年度に北海道教育委員会が実施した範囲確認調査の結果、両遺跡は一つの広がりであることが判明し、以来西野幌12・17遺跡と仮称してきたが、昭和61年度、北海道教育委員会と遺跡名称について協議の結果、西野幌12遺跡として登載した。遺跡の範囲は51,165 m²と確認されている。調査は昭和57年度より継続して実施、発掘総面積は30,311 m²に及んでいる。

遺構と遺物

7カ年の調査により竪穴住居址4軒、竪穴状遺構4軒、土壙211基、Tピット11基、炉跡1基、小ピット・柱穴計約400基、フレイク・チップ集中47カ所、焼土が786 m²検出されている。竪穴住居址は調査区南側で検出された。うち1軒は縄文早期、3軒は縄文中期の遺構である。竪穴状遺構は中央部南側に検出された。縄文中期の遺構と考えられる。土壙は縄文中期のものが中央部西側から南側にかけてかたまっている。縄文晩期の遺構は中央部西側で検出

遺跡の位置

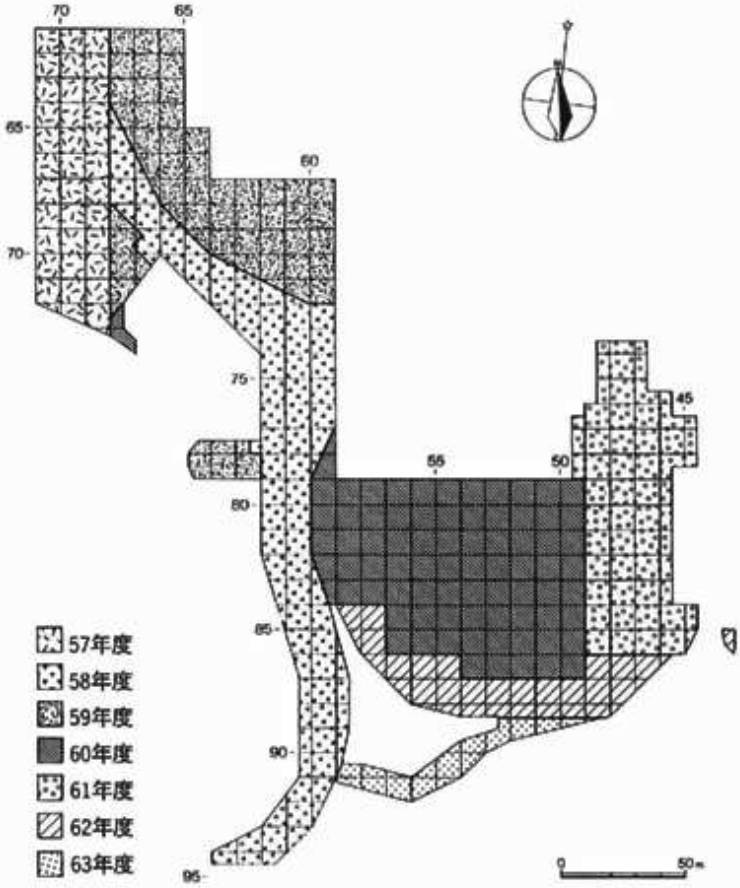
されたものが多い。続縄文期の土壙は北西部にまとまって検出された。

今年度の調査で検出された遺構は、これらのうち、竪穴住居跡1軒、土壙12基、Tピット1基、フレイク・チップ集中3カ所、小ピット・柱穴約32個、焼土が約30 m²である。

出土遺物のうち土器は、縄文時代早期から続縄文期に至る各時期の資料がある。早期の資料では、中葉の見叡文土器もわずか出土しているが、主体となるのは後葉のコッタロ式で、この時期の竪穴住居跡が位置する調査区南西部に多数検出された。前期では末葉の大麻V式が少量みられた。中期の資料では、円筒上層式、天神山式、柏木川式、北筒式などである。なかでも、北筒式土器はとくに多く、本遺跡を代表する資料といえよう。後期では、初頭の余市式から中葉の手稲式までの土器が出土しており、なかでも余市式系の資料が多い。土器は末葉のタンネトウL式に含まれる。

続縄文期の土器は、前半の後北A式と後半の後北C_2、D式で、とくに後者は墓壙が集中する北西部に濃密に分布していた。

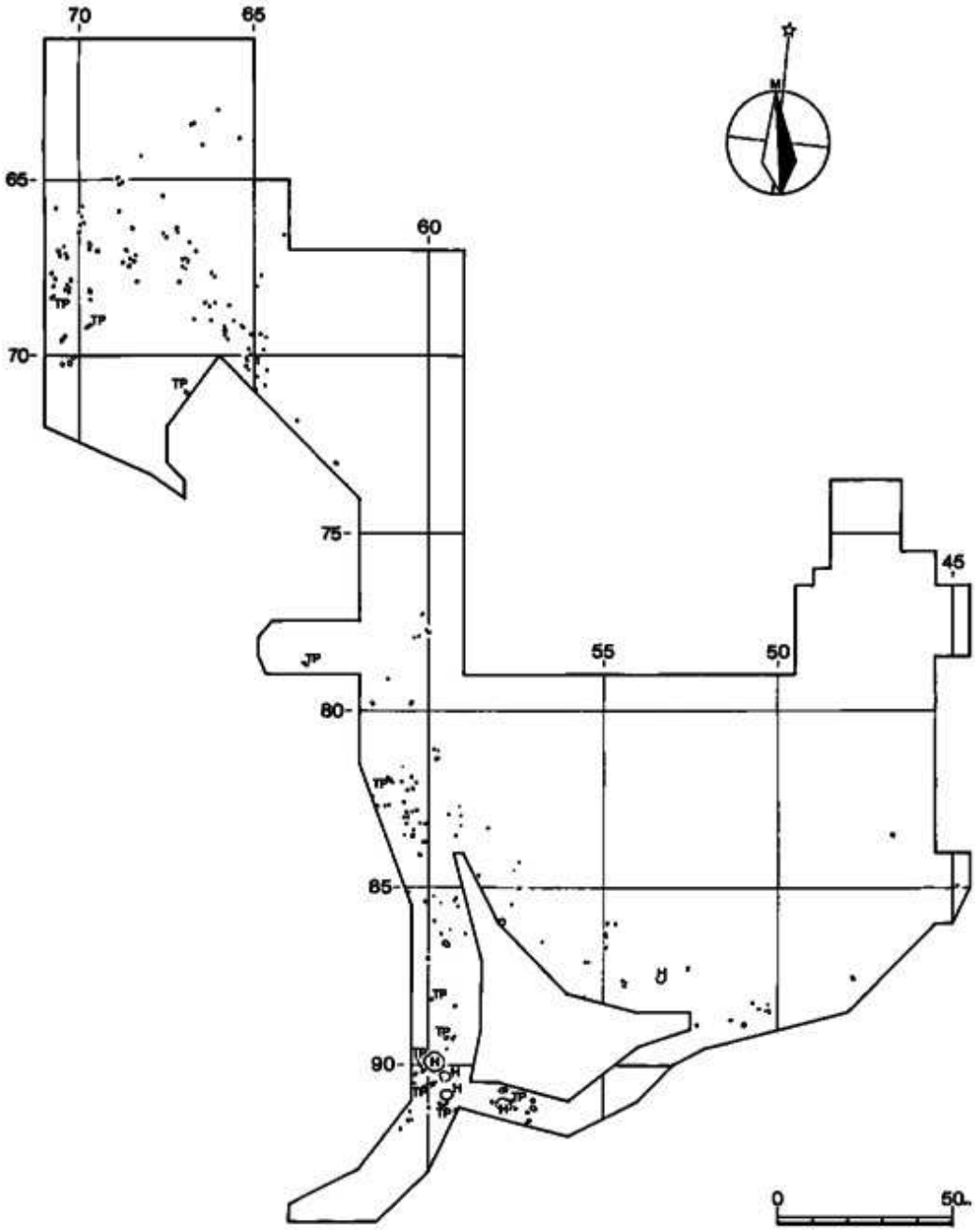
石器では石鏃が多数出土している。槍先やスクレイパーなどもみられる。特徴的なものには北海道式石冠がある。このほか、フレイク・チップは約30万点に及んでいる。



各年度の調査区域

遺跡近景

遺構調査状況



遺構位置図

納内6丁目付近遺跡（E－10－40）

事 業 名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：深川市納内町字納内6133ほか

調査面積：8,540 m²（昭和61・62年度：13,824 m²）

発掘期間：昭和63年5月6日～10月28日

調 査 員：西田　茂、立川トマス、和泉田　毅、石川　朗

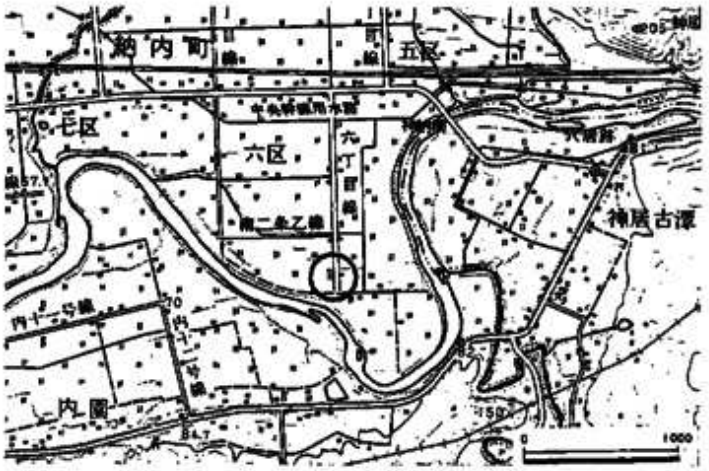
遺跡の概要

納内6丁目付近遺跡は、大正7年刊行の『北海道史』に、約30の竪穴が見られると紹介されているところにあたる。さらに、昭和50年刊行の『いしゅからべつ』（深川地方史研究会）には、本遺跡で円形の盛土墳から蕨手刀が出土したという記載がある。

大雪山系に源流をもつ石狩川は、神居古潭の渓谷を急流となってくだり、深川の平野部にいたって、大きく南に向きを変える。そして約2km下流で、大きく北西方向へ向きを変えるあたりから流れはゆるやかとなる。このゆるやかな流れがもたらす河川堆積物が一面に広がり始めるところの右岸段丘上に、納内6丁目付近遺跡が立地している。

遺跡の調査予定範囲は、南北に走る道路建設予定地のうち南端は石狩川の川岸、北端はここから約250 mの距離にある段丘崖までである。今年度の調査区域は調査予定地の西側、東側の中央部分、標高68 m～70 mのところである。

石狩川の氾濫原にあたり、増水時の堆積物とみなされるものがみられる。繰り返し堆積している砂礫層、砂質土層、シルト質土層、粘質土層から、縄文時代早期・前期・中期・後期、および擦文時代の遺構・遺物が検出されている。このうち、とりわけ良好に残存しているのは、縄文時代早期の中茶路式土器の時期の遺構・遺物である。また、調査区の北端近くに東西にはしる幅約7 mの沢地形があり、その底には縄文時代早期の泥炭層がみられた。草木の枝葉で満たされた泥炭層からは、中茶路式土器のほかにクルミ・キハダ・ブドウなどの種子、それに昆虫などが検出されている。



遺跡の位置図

遺構と遺物

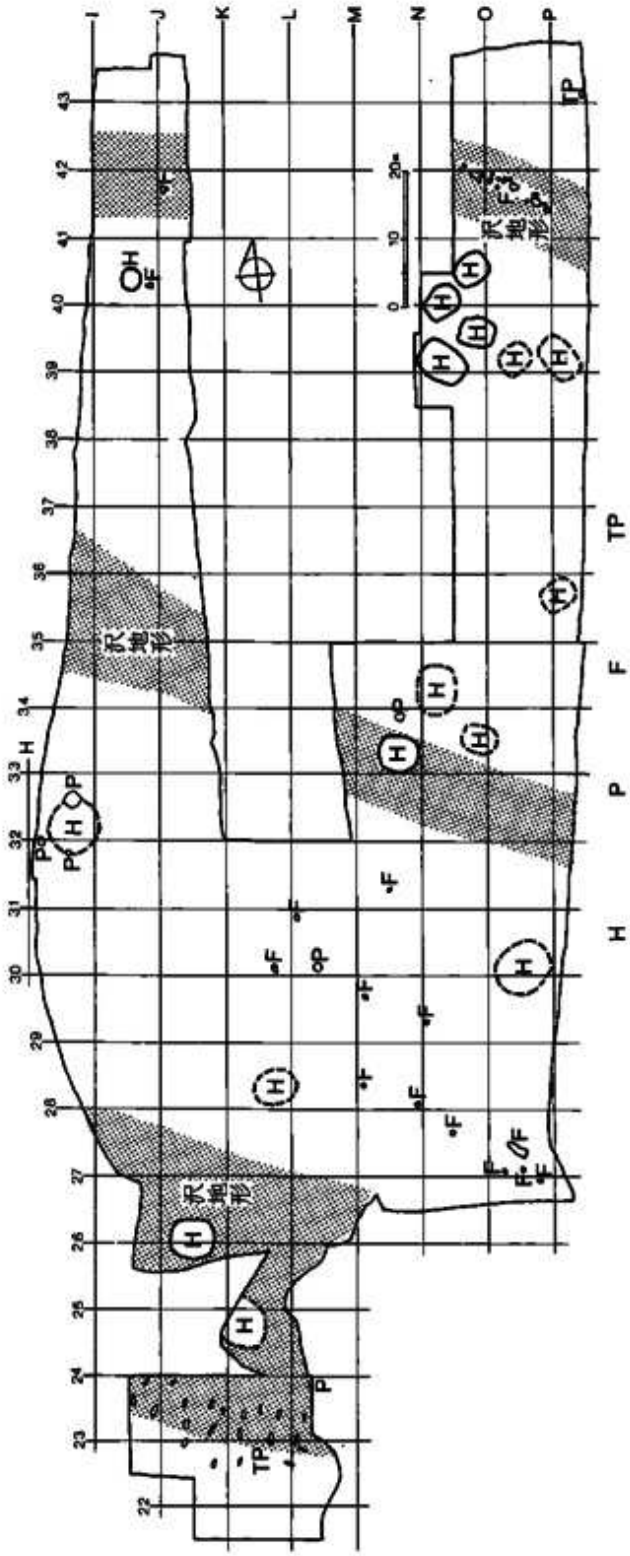
遺構は竪穴住居跡16軒、土壙6基、Tピット23基、焼土23か所が検出された。このうち竪穴住居跡10軒は、中茶路式土器の時期のもので、平面形は長径5～8 mの隅丸長方

形、中心部近くに焼土のあるものが多い。Tピットは、22基が南端近くに集中しており、残り1基は北東端にある。掘り込まれた土層から判断すると、縄文時代中期よりも新しい時期のものと考えられる。

遺物は、50,700点出土している。このうち、15,900余りの土器の7割以上が中茶路式土器で、器形を復元できたものが30個以上ある。ほかに少量ではあるが、東釧路Ⅲ式土器、コッタロ式土器、東釧路Ⅳ式土器、縄文尖底土器、押型文平底土器(押し引き文土器)、円筒上層式土器、北筒式土器、擦文式土器などがある。また、中茶路式土器の文化層から1m以上も下層にある砂礫層から縄文の土器、組紐圧痕文の土器(東釧路Ⅱ式)、無文の土器などが47点検出された。

石器は石鏃・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・石のみ・砥石・たたき石・石皿・台石などがある。

これらの多くは中茶路式土器に伴う良好な石器群をなすもので、それぞれに特徴的な形態を指摘できる。石狩川の川原に近いこともあって、砂岩製の大きな石皿・台石が目につく。



遺構調査状況（H－2）

遺物出土状況（H－5）

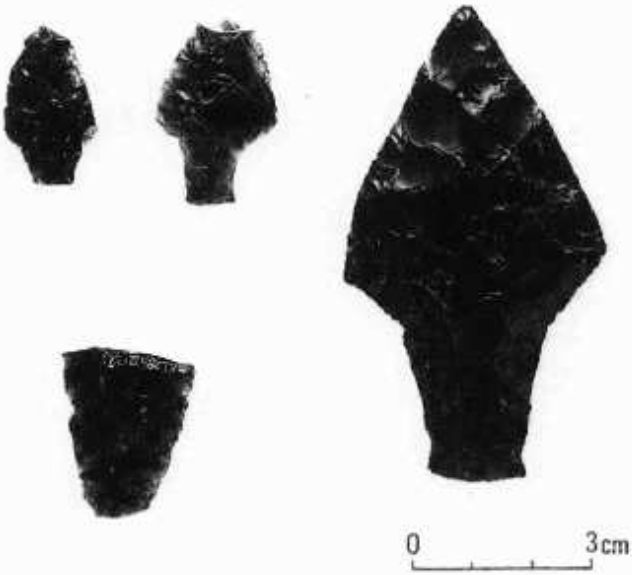
包含層調査状況

泥炭層調査状況

竪穴住居跡H－8

H－10 出土土器

遺物集中②出土土器



出 土 石 器

遺物集中⑥出土土器

国見2遺跡 (E－10－30)

事 業 名：北海道縦貫自動車埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：深川市音江町字音江493番地ほか

調査面積：5,000 m²（昭和61・62年度18,900 m²）

発掘期間：昭和63年5月6日～7月2日

調 査 員：鬼柳　彰、森　秀之、中田裕香

遺跡の概要

国見2遺跡は深川市南部を西流する石狩川左岸から約1km南方の丘陵地帯に位置している。

遺跡が立地する丘陵は神居古潭の峡谷と空知川の間に広がる幌内山地中央にそびえるイルムケップ火山の北裾にあたり、この山に源をもつ音江川が、この丘陵に沿って北流、石狩川に合流している。

音江町には先史時代の遺跡が数多く分布しており、北海道縦貫自動車道建設工事に伴う発掘調査は、本遺跡のほか音江川右岸の音江2遺跡と、ここから西方約8kmの稲見山(113 m)にある向陽2遺跡でも行われた。稲見山には駒井和愛博士の調査で知られる「音江の環状列石」がある。また本書の11ページに記した東広里遺跡は、国見2遺跡の北西約1.5kmの石狩川岸に所在している。

調査区は馬の背状の丘陵の頂部から西側斜面に広がっており、ほぼ全域が畑地になっている。

遺物包含層が良好に残されていたのは、丘陵頂上の一部と調査区南東部にある沢跡付近で、これ以外はすべてほぼ地山まで耕作されており、遺構以外の遺物の大半は耕作土中から出土した。遺構・遺物の分布状態から、調査区は遺跡の北端にあたるものと判断される。

調査区は全体で23,900 m²に及ぶ。このうち18,500 m²については、昭和61・62年度に調査を終え報告書は刊行済である。今年度の発掘は最終年度にあたる。

遺跡の位置

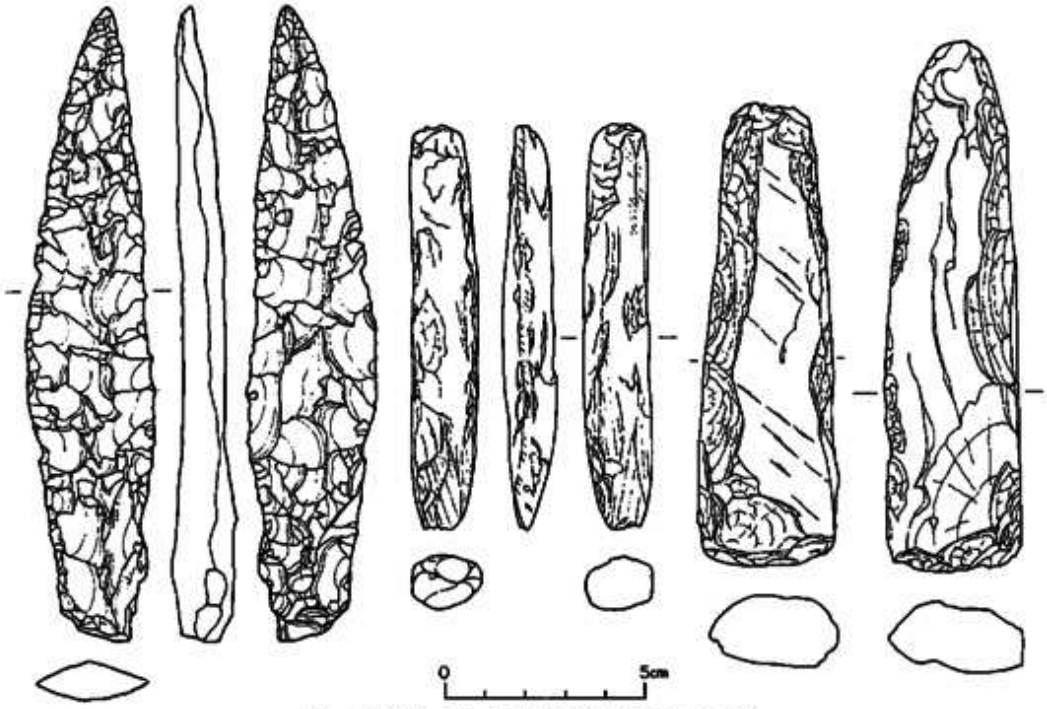
遺構と遺物

検出された遺構は調査区南部にある竪穴住居跡1軒と土壙2

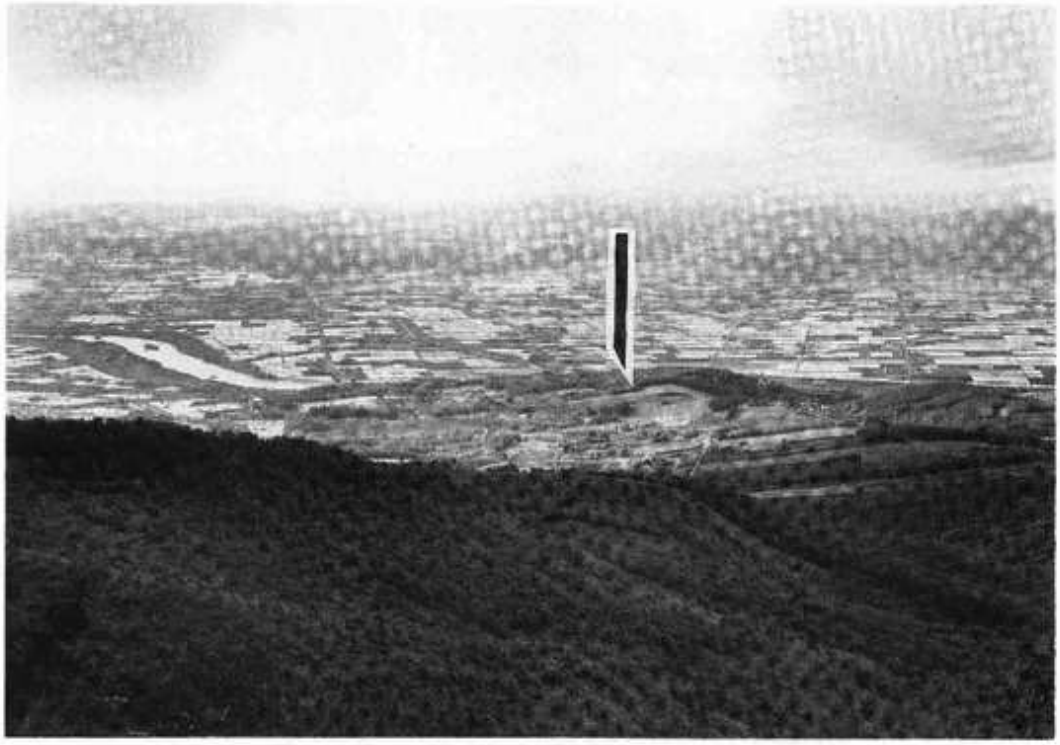
基である。住居跡からは縄文時代後期初頭に位置づけられる余市式土器片が出土、斜面にある土壙P—2からは、中期末の北筒式土器一個体が検出された。

包含層中の遺物は、耕作により本来の位置から動いているが、全体的にみると遺構が分布する調査区南東部の丘陵頂部から西斜面中腹に多い。斜面中腹では、片岩の丸のみ形石斧1点と石斧4点が削平をまのがれ束ねられた状態で出土した。

包含層から出土した遺物は計約25,000点。土器はこのうち500点余で遺構から出土したものと同様の北筒式・余市式が大半を占めるが、早期とみられる薄手のもの、前期に属する押型文土器も数点ある。出土した石器は石鏃・石槍・ナイフ・つまみ付きナイフ・スクレイパー・石斧・丸のみ型石斧・すり石・たたき石・くぼみ石・砥石・石皿・台石など各種あるが、このうち多数を占めるのが片岩の石斧及びこれの未成品である。なかには石斧の製作工程を復元できる資料もある。これらの石斧製作の際に生じたとみられる片岩の剝片は約23,000点出土している。



左・ナイフ、中・丸のみ形石斧、右・石斧



遺跡遠景（沖里河山から）

石斧出土状況

出土土器（高さ約42 cm）

納内3遺跡 (E－10－47)

事 業 名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所 在 地：深川市納内町字納内 1196－435、437 ほか

調査面積：40,253 m² (昭和 62 年度 12,192 m²)

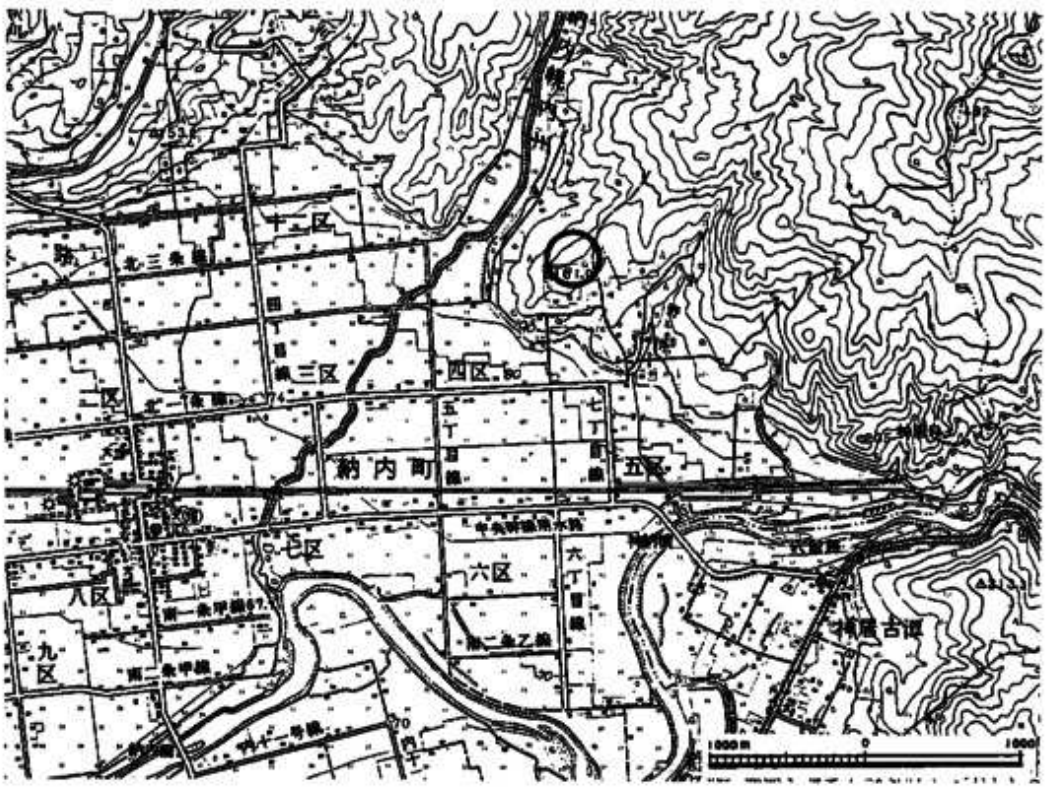
発掘期間：昭和 63 年 5 月 6 日～10 月 27 日

調 査 員：越田賢一郎、千葉英一、佐藤和雄、熊谷仁志、野中一宏、葛西智義、花岡正光、鬼柳　彰、森　秀之、中田裕香

遺跡の概要

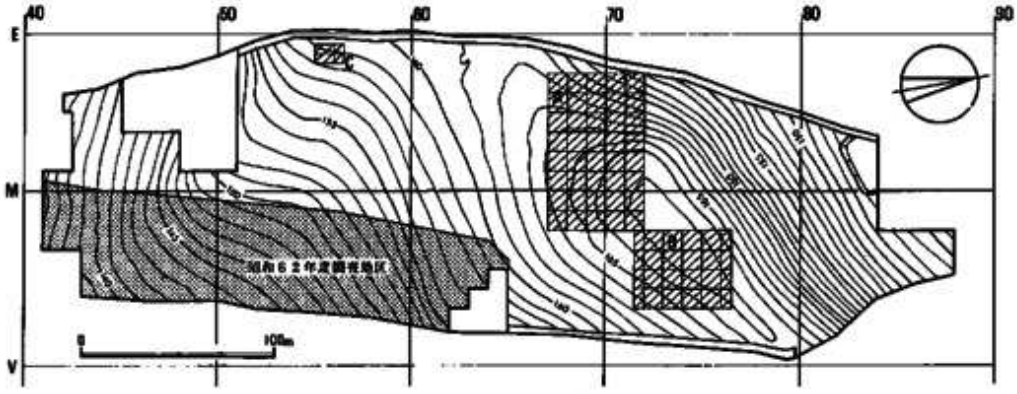
本遺跡は深川市街の東北東約 10 km、石狩川右岸の常盤山(592 m)の南西支脚上にある。調査区は標高 140～168 m、尾根の頂部と南北両斜面に広がっており、調査前までは、山林や畑になっていた。

今年度の調査面積のうち、北側斜面下部と昭和 62 年度発掘調査地区の西側に隣接する畑地部分の 16,200 m² については、昭和 61・62 年に行われた事前調査および発掘調査の結果をもとに、重機を併用して遺構確認調査を実施したが、当該地区から遺構は発見されなかった。今回の発掘調査によって、本遺跡の主体は尾根の平坦部にあることが判明、さらに調査区域西側の丘陵先端部に広がっているものと推測される。

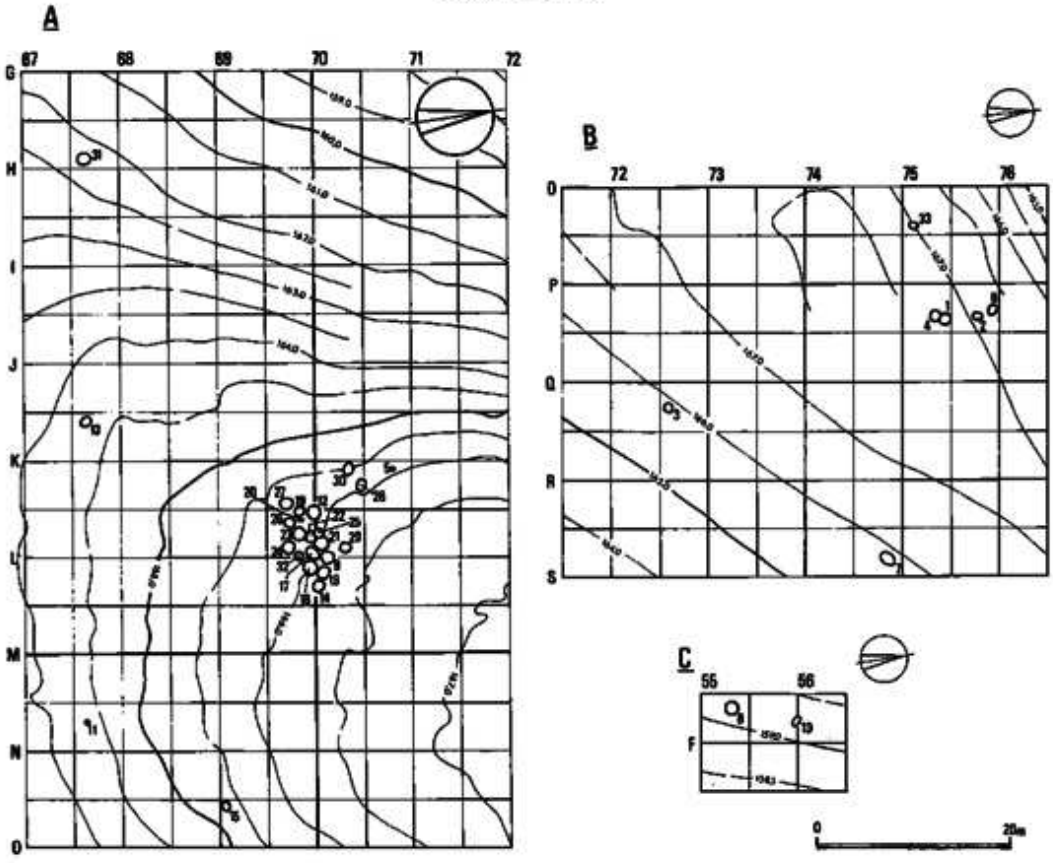


遺跡の位置

本遺跡における基本的な層序は、上位から、耕作土（Ⅰa）もしくは黒褐色の腐植土層（Ⅰb）、焼土と考えられる暗赤褐色土層（Ⅱa）、暗褐色土層（Ⅱb）、褐色を呈する漸位層（Ⅲ）、黄褐色土層のいわゆる地山（Ⅳ）となっており、本来の遺物包含層はこのうちⅠb・Ⅱa・Ⅱbである。



発掘調査区域



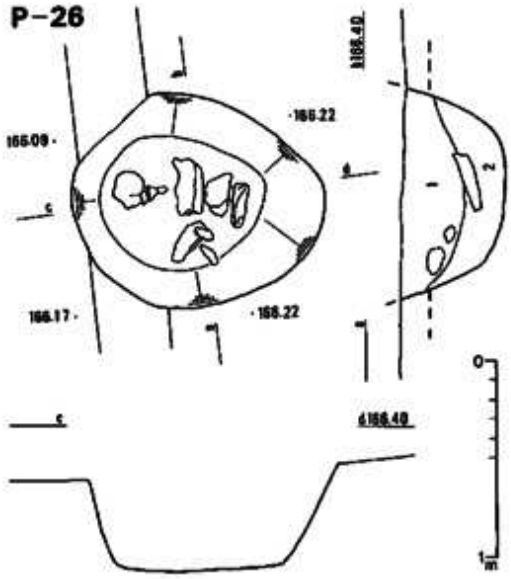
遺構位置図（A・B・Cの位置は上図参照）

遺構と遺物

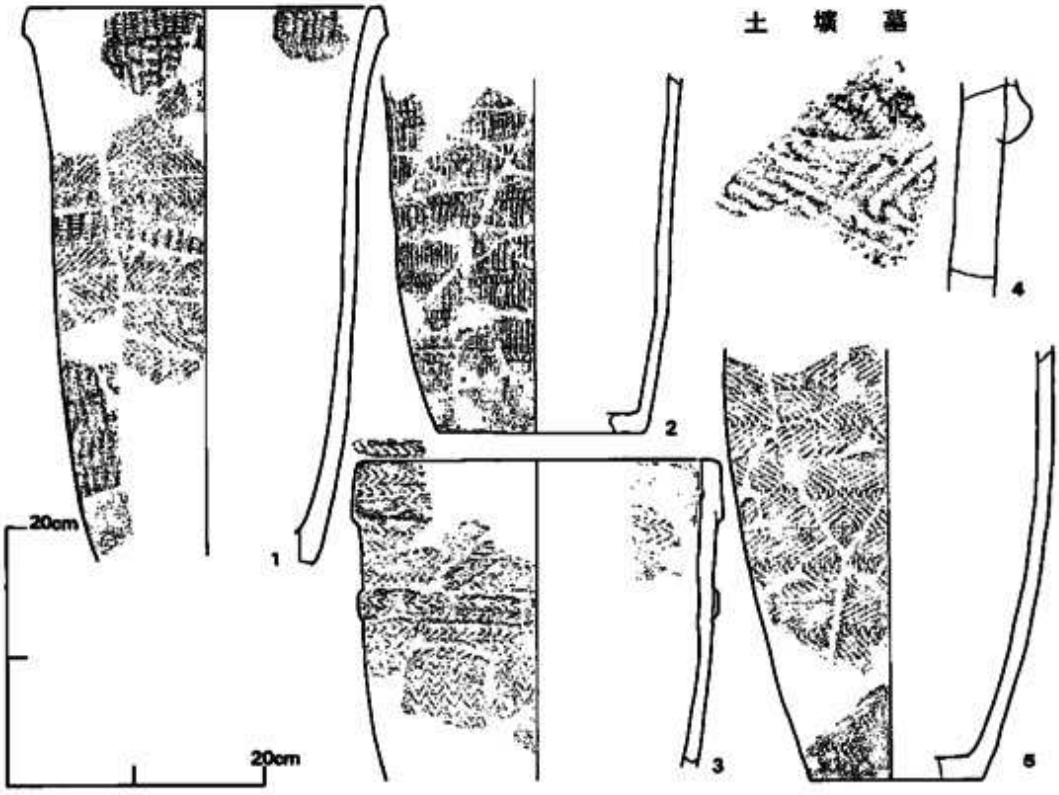
遺構は土壙（ピット）33、集石3、焼土1が検出され、住居跡は発見されなかった。これらの遺構は尾根の平坦部に分布している。土壙の多くは径1～1.5 m、深さ50～60 cmのほぼ円形を呈するもので、P－26のように、土壙内に人頭大の自然礫が数個入っているものは5基検出されている。

遺物は約22万点が出土している。このうち土器は約1万点で、縄文時代中期の円筒土器上層式、押型文平底土器、押引文土器、北筒式土器が大半を占める。ほかに縄文時代前期の中野系土器、続縄文土器もわずかにある。

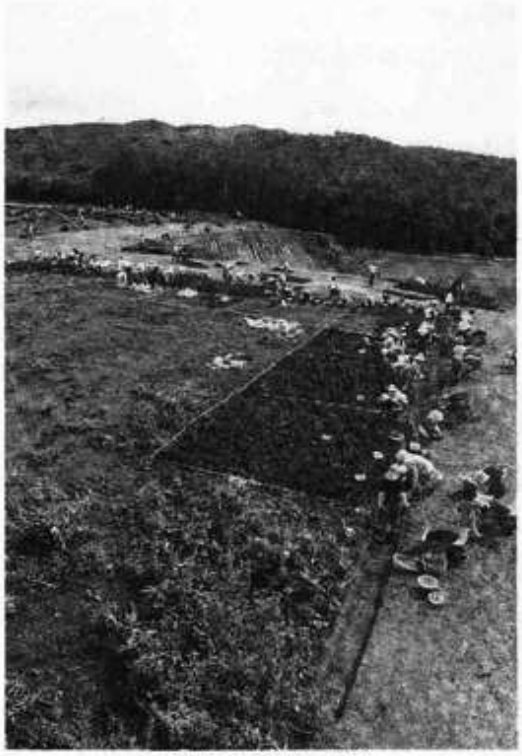
また調査区北斜面では1個体分の須恵器が出土した。石器は礫を含めて約21万点で、器種には石鏃・石錐・石槍・つまみ付ナイフ・石斧・すり石・たたき石・くぼみ石・砥石・台石などがある。とりわけ片岩を石材とする石斧の製作に関連する資料は11万点にも及んでおり、本遺跡の性格の一端を窺わせる。



土　壙　墓



出土土器（3～5は共伴、4・5は同一個体）



調査状況（SW—NE）

土壙群（S—N）

土壙P—26 遺物出土状況

遺物出土状況

牛舎川右岸遺跡（J－04－66）、牛舎川左岸遺跡（J－04－67）

事 業 名：北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査（事前発掘調査）

委 託 者：日本道路公団札幌建設局

所在地・調査面積：牛舎川右岸遺跡――伊達市南稀府町307ほか　1,265 m²

牛舎川左岸遺跡――伊達市北黄金町106-2ほか　768 m²

発掘期間：昭和63年7月4日～8月31日、昭和63年9月25日～10月22日

調 査 員：高橋和樹、田才雅彦、三浦正人、谷島由貴、工藤義衛、鬼柳　彰、森　秀之、中田裕香

調査の概要

牛舎川は伊達市街の南東約6 kmに位置する稀府岳（702 m）に源を発し、約8 km西流して内浦湾に注いでいる。牛舎川右岸、牛舎川左岸の両遺跡は河口より約2 km上流の丘陵緩斜面に所在している。

北海道縦貫自動車道建設用地のうち、伊達市内には昭和56年度に実施された北海道教育委員会による埋蔵文化財所在確認調査によって、この両遺跡を含めて4カ所の遺跡が所在することが判明した。当センターはこのうち牛舎川右岸、牛舎川左岸の両遺跡について昨年度から、遺跡の範囲及び内容を確認するための事前発掘調査を実施した。

調査にあたっては、両遺跡とも所在確認調査で把握されていた範囲の全域に10 mグリッドを設定、各グリッド内に於いて2 m四方のテストピットを掘開して、層序の把握と遺構・遺物の確認を行った。

遺跡の概要

〔牛舎川右岸遺跡〕：牛舎川の右岸、標高約80 mの西向き緩斜面に位置している。ここは丘陵地帯から平野部に移る所で、牛舎川によって形成された扇状地にあたる。遺跡とその周辺は現在、おもに畑として利用されており、ここから海岸にかけての平野には水田が広がっている。

今回の調査で判明した発掘調査対象範囲は21,523 m²である。市道と牛舎川岸の間では、縄文時代中期の遺物が多数出土しており、後期や続縄文時代の土器もみられる。牛舎川寄りには竪穴住居跡・土壙・焼土などが分布することが確認され、ここには集落跡が残されている可能性が強い。

土層は8層に分かれ、径20 cm～30 cmほどの円礫が多量に含まれている。1層から4層には有珠山起源の火山灰が堆積しており、この下の5層（黒色土）が遺物包含層である。包含層は川の近くほど厚く、深さも約1 m以上に達している。

〔牛舎川左岸遺跡〕：牛舎川の支流、稀府川の扇状地に位置している。牛舎川右岸遺跡とは川をはさんで約600 m離れており、調査区とその周辺には、畑や段状につくられた水田がある。

今回の調査によって判明した調査対象範囲は14,967 m²である。このうち稀府川の左岸では、おもに縄文時代晩期の土器が出土、ほかに早期や擦文時代の遺物も含まれている。稀府川の右岸には縄文時代早期と擦文時代の土器が多い。土層は牛舎川右岸遺跡と同様、8層に分かれ、円

礫が多量に含まれている。遺物包含層は5層（茶褐色土）と6層（褐色ローム質土）で、稀府川の左岸では深さが1m以上ある。

遺跡の位置

2　研修・研究会等

研修会派遣

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者等研修

「生物環境課程」　昭和63年4月14日～4月28日　派遣者　田才雅彦

「遺跡環境課程」　昭和63年10月12日～10月25日　〃　皆川洋一

「建築遺構課程」　平成元年2月15日～2月28日　〃　前田正憲

北海道文化団体協議会黒竜江省派遣団

昭和63年8月22日～8月27日　参加者　鬼柳　彰

研究会参加

北海道考古学会第26回総会研究発表（松前町）　昭和63年5月14・15日

「平取町二風谷遺跡について」　発表者　三浦正人

「遺物・遺構からみた中・近世の北海道」　〃　越田賢一郎

南北海道考古学情報交換会（函館市）

「最近の渡島半島における縄文中期末～後期初頭の諸問題について」

昭和63年12月3日　助言者　大沼忠春、参加者　前田正憲・工藤義衛

北海道考古学会発掘調査報告会（札幌市）

昭和63年12月17日　発表者　大沼忠春、参加者　調査部職員

青森県埋蔵文化財調査センター縄文文化検討会シンポジウム（青森市）

平成元年3月18・19日　参加者　大沼忠春

研修・研究会講師派遣及び協力

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者等研修

「低湿性遺跡の調査と古環境」　昭和63年4月20日～4月23日　講師　高橋和樹

昭和63年度文部省科学研究費試験研究

「縄文時代土偶を例とした考古学学術データベースとその支援システムの開発」

昭和63年11月25・26日　研究協力者　長沼　孝

奈良国立文化財研究所埋蔵文化財発掘技術者等研修

「縄文土器調査過程」における研究資料等の検討

平成元年2月8日～2月14日　協力者　大沼忠春

部内研修・研究会

『石器・礫の接合から何を明らかにできるか』　昭和63年4月23日

「北海道大学構内の調査から」　講師　北海道大学　横山英介

「新道4遺跡出土の旧石器を接合して」　〃　調査第4課　千葉英一

縄文土器検討会　平成元年3月7日

「貝殻文土器について」　講師　北海道大学　横山英介

「縄文早期末の編年について」　〃　〃　林　謙作

「東釧路系土器の編年について」　〃　調査第3課　大沼忠春

発掘調査現地研修会

「河川堆積物中の考古資料」　昭和63年7月14・15日　（納内6丁目付近遺跡にて）

参加者　調査部職員

「栄町5遺跡の遺構と遺物及び周辺の遺跡について」

昭和63年9月2日　（栄町5遺跡にて）

参加者　調査部職員

調査報告会

昭和63年度調査遺跡についてスライド映写による報告

昭和63年11月15・16日　発表者　各遺跡担当者

北海道文化団体協議会黒竜江省派遣団参加報告会

昭和63年12月9日　発表者　鬼柳　彰

奈良国立文化財研究所発掘技術者等研修参加者報告会　平成元年3月28日

発表者　田才雅彦、皆川洋一、前田正憲

資料収集等出張報告会　平成元年3月29・30日

発表者　中村福彦、種市幸生、大沼忠春、越田賢一郎、長沼　孝
花岡正光、森岡健治、佐川俊一、遠藤香澄、西田　茂
中田裕香、熊谷仁志、葛西智義、森　秀之

全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会　昭和63年9月20日～9月22日

参加　加盟37団体　118名

講話「北海道文化の形成について」　昭和63年9月21日　講　師　東海大学　岡田淳子

現地研修　苫小牧市　美沢3遺跡　昭和63年9月21日　説明者　大沼忠春

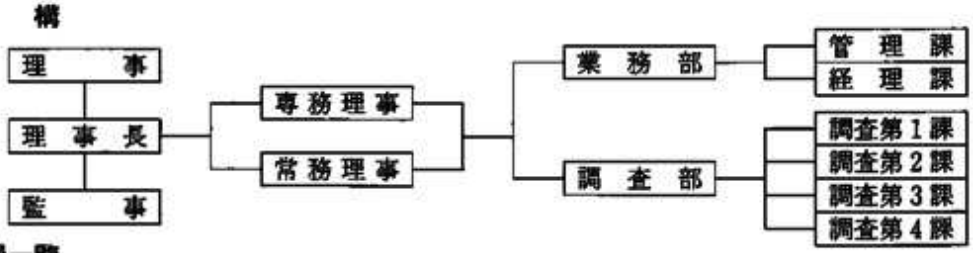
深川市　納内6丁目付近遺跡　昭和63年9月22日　〃　西田　茂

3 組織と機構

役員

理事長	澤　宜彦	北海道教育委員会教育長
専務理事	永田春男	北海道埋蔵文化財センター
常務理事	竹田輝雄	北海道教育庁社会教育部文化課主幹
理事	今井道雄	北海道文化財保護協会会長
理事	高倉新一郎	北海道文化財保護審議会委員
理事	大場利夫	札幌市文化財保護審議会委員
理事	峯山巌	北海道文化財保護協会副会長
理事	藤本英夫	北海道文化財研究所長
理事	寺山敏保	北海道企画振興部長
理事	岩原英志	北海道教育庁管理部長
理事	福島俊也	北海道教育庁社会教育部長
監事	田上吉也	北海道国際文化協会会長
監事	上田實	北海道副出納長兼出納局長

機構



職員一覧

業務部

職	氏名	所属
業務部長	○伊藤庄吉	
管理課長	○鈴木三郎	管理
主事	葛西宏昭	〃
嘱託	金田真一	〃
〃	瀧坂惣次郎	〃
〃	藤本昌子	〃
〃	磯田千秋	〃
経理課長	○宮下芳美	経理
主事	菅野聡	〃
嘱託	石井義男	〃
〃	吉田貴和子	〃
〃	木村昭一	〃

調査部

職	氏名	所属
調査部長	○中村福彦	
調査第1課長	○種市幸生	第1課
主任	○高橋和樹	〃
文化財保護主事	○田才雅彦	〃
〃	三浦正人	〃
〃	田口尚	〃
〃	谷島由貴	〃
嘱託	工藤義衛	〃

職	氏名	所属
調査第2課長	鬼柳彰	第2課
主任	西田茂	〃
文化財保護主事	立川トマス	〃
嘱託	石川朗	〃
〃	中田裕香	〃
〃	森秀之	〃
〃	和泉田毅	〃
調査第3課長	○大沼忠春	第3課
主任	佐川俊一	〃
〃	遠藤香澄	〃
〃	○長沼孝	〃
嘱託	前田正憲	〃
〃	森岡健治	〃
〃	皆川洋一	〃
調査第4課長	○越田賢一郎	第4課
主任	○千葉英一	〃
〃	佐藤和雄	〃
文化財保護主事	熊谷仁志	〃
〃	野中一宏	〃
〃	葛西智義	〃
嘱託	花岡正光	〃

○印は派遣（道教委）職員

II　調査の歩み

1. 調査の歩み

当センターは昭和54年9月1日、それまで北海道教育委員会文化課が行っていた、新千歳空港及び北海道縦貫自動車道関連の発掘調査事業を受け継ぎスタートしたのであるが、その後事業数・事業量ともに増加し、調査個所も一部稀薄な地域を除いてほぼ全道に及ぶに至った。

発掘調査については準備を4月中に行い、現地調査は5月の連休明けから開始する。冬の早い本道は調査期間が短かく、10月末には終了となる。11月から翌年3月までが整理期間となり、原則的に報告書は毎年度刊行している。

調査の体制は発足当初、調査員一調査補助員一作業員を基本形態としたが、昭和58年調査補助員については嘱託職員に切替えた。また、調査の効率化を目的に写真・測量については極力外注もしくは専門技師の配置を基本としたが、適当な外注先や技師が得られなかったことから、現在では一部を除いて行っていない。

調査方法については、発掘調査の前段階で全体の25%を発掘し、早期に遺跡の全体像を把握するよう努めていること、杭うち、空撮、重機などは調査期間の短縮、経費の節減の観点から随時導入していること、また整理作業における各種の分析・鑑定については、委託もしくは外注で対処しているが、火山灰分析、土器胎土分析、木製品・鉄製品の保存処理の一部については、独自に行っている。

2. 調査の概要

当センターが過去10年間に発掘調査した成果について、年代順に概観してみようと思う。

〈旧石器時代〉

地域的には、北は旭川方面から南は函館方面まで多くの遺跡が発見されている。特に、これまで断片的な資料の発見しか伝えられていなかった道南地方で、頁岩を主体としたきわめて良好な資料が発見されている。今金町美利河1遺跡、知内町湯の里4遺跡の資料などがそれで層位的に捉えられたため、年代序列や石器の組合せ、製作技法などの問題を解明する上で大いに役立った。また、産出地が大陸といわれるかんらん岩製の玉や台形石器が発見されたことは、大陸や本州方面との文化的交流の可能性が出てきたわけで、今後の研究においてはより広域的な資料の比較が必要となった。湯の里4遺跡からは土壙墓が検出されている。

〈縄文時代〉

草創期の新潟県室谷洞窟出土資料に類似の土器が、江別市大麻1遺跡から出土して話題となったが、資料が少ないことから確定的なものとはいえず、今後の研究に待つところが大きい。

早期では、貝殻文・条痕文系土器群の遺跡として、白老町虎杖浜3遺跡、恵山町中浜E遺跡などがあるが、出土資料は少ない。絡条体圧痕文・組紐圧痕文系土器群の遺跡としては、新千歳空港美沢川流域の遺跡、登別市川上B遺跡、深川市納内6丁目付近遺跡などがある。これら

の遺跡からは、比較的まとまった資料が出土したため、型式分類上細部にわたる研究がなされている。また住居跡群については、この時期の集落のあり方を示すものとして興味深い。美沢川流域の美沢3遺跡などから出土した足型付土版4点は、東釧路Ⅳ式期のものであることがほぼ確定的となったし、墓に副葬されたものであることも判明した。

前期では、美沢川流域の美沢3遺跡から綱文式に並行する花積下層式類似の土器を伴った結束のない羽状縄文土器群が出土している。同じく美沢4遺跡からは、静内中野式期のヤマトシジミを主体とする貝塚が発見されている。縄文海進に関連する遺跡として重要である。

中期では、円筒上層式のまとまった資料が、道南の函館市石川1遺跡・桔梗2遺跡、木古内町新道4遺跡、上ノ国町小岱遺跡、道北の礼文町上泊4遺跡などから出土している。上泊4遺跡の土器は、道南出土の土器と大差のないもので、日本海ルートによる両地方の密接な交流の証左として意義深い。石川1遺跡、小岱遺跡からは各1棟大形の住居址が発見されている。東北地方との文化的交流を示すものであろう。桔梗2遺跡からはシャチ形土製品が発見されている。使用目的を考える上で、クジラをもたらす沖の神として崇めていたというアイヌ文化の例などは参考となるであろう。

押型文系土器群のまとまった資料が、深川市の納内3遺跡、納内6丁目付近遺跡などから出土している。文様要素には多くのものがみられることから、平底押型文土器については再検討が必要と思われる。また、納内3遺跡から片岩を利用したおびただしい量の石斧の製作に関わる資料が出土している。石斧の製作址と考えて相違なかろう。

後期では、湯の里5遺跡から二重の環をもつ小形の環状列石が発見された。この種の遺跡が道南地方にも分布することはほぼ確実である。国指定史跡忍路環状列石のある台地下の忍路土場遺跡から、手稲式・蛇(ほつけま)潤式期の土器、石器をはじめとして、低湿性遺跡特有の木製品、繊維製品、漆器、動・植物遺体など大量の遺物が出土した。これらの資料は、縄文文化を解明する上できわめて重要なものであり、また、「日本海文化」に関連する資料としても注目される。ソバの花粉・シソ・ゴボウ・ホオズキの種子が検出されたことは、縄文農耕論に一石を投ずるものであろう。

美沢川流域の遺跡から16基の周堤墓（環状土籬）が発見されている。埋葬形態としては、屈葬、伸展葬の両方がみられる。同流域の遺跡からは、土壙墓の副葬品としてヒスイの玉が多数出土している。これらは分析の結果、新潟県糸魚川産のものであることが判明している。木古内町新道4遺跡から発見された大きな弧状の盛土遺構や美沢川流域の美々4遺跡から発見された盛土墓などは、この時期の集落や葬制を考える上で重要である。

晩期では、亀ヶ岡式の土器が知内町湯の里6遺跡、木古内町札苅遺跡からまとまって出土しているほか、白老町社台1遺跡から朱塗りの土器が3個出土している。札苅遺跡にみられる焼土群は、江別市内の遺跡で発見されたものと同様のものと思われ、狩猟に関連した野焼きの可能性が論じられている。三石町旭町1遺跡から釧路緑ヶ岡式土器並行期の在地系土器が47個埋甕として出土しているが、人骨が発見されなかったことなどから祭祀に関する遺構と考えられ

ている。美沢川流域の美々4遺跡からは、墓に埋納された土偶、シラカンバ樹皮を用いた棺、道跡、動物の足跡などが発見されている。

千歳市ママチ遺跡では数百の土壙が発掘され、このうちの一つから土製仮面が出土した。

〈続縄文時代〉

恵山系の遺跡としては、江別市吉井の沢1遺跡、美沢川流域の美々2遺跡などがある。吉井の沢1遺跡から、白老町アヨロ遺跡でみられたような完形土器、ヒスイの玉、管玉などを副葬した土壙墓群が検出されている。後北系の遺跡としては、江別市西野幌12遺跡、西野幌1遺跡などがある。西野幌12遺跡からは100基以上の土壙墓が発見されている。恵山の墓に比べ副葬品がきわめて少ない。多くの場合、中小の礫が検出される。道東北系のメクマ式、香深井式、下田ノ沢1式土器などを出土する遺跡が礼文町上泊3遺跡などで調査されている。住居跡、土壙墓が検出されている。

〈擦文文化期〉

この時代の遺跡としては、美深町楠遺跡、深川市東広里遺跡、千歳市ママチ遺跡などがある。楠遺跡では39棟の住居跡が調査されている。道北地方の該期の集落形態を研究する上で貴重な資料を提供したといえる。また、ソバ・イネ科の植物の花粉が検出されたことから、栽培の可能性が指摘されている。東広里遺跡からは炭化したコメが検出された。道内では3例目の発見である。

〈中世～近代〉

チャシ跡の調査が平取町ユオイチャシ跡、ポロモイチャシ跡で行われた。ポロモイチャシ跡では主体部から建物跡が検出されている。ユーカラに登場する建物との関連が注目される。また、深川市内園2遺跡で縄文遺跡の調査中チャシ跡1基を発見した（内園2チャシ跡）。

神社跡の調査が上磯町矢不来天満宮跡で行われた。道南十二館の一つ茂別館の館神を祀る神社として18世紀後半に建立されたもので、大正年間まで存続した。建物遺構と各時期の陶磁器、銭貨などが出土している。

砂金採取跡の調査が今金町美利河1・2砂金採取跡で行われている。17世紀前半～明治の初めまで、流し掘りによる採掘が行われていたようである。その当時の水路、石垣、石積などが現存していたため、調査はそれらの遺構の実測に主眼をおいて行った。史跡松前藩戸切地陣屋跡の調査が史跡整備事業に関連して、昭和56～58年にかけて行われた。この陣屋は松前藩が北辺防備の必要から幕末に築いたものである。建物遺構、陶磁器、鉄製品などが出土している。明治時代の水道木管が岩見沢市野々沢C遺跡から発見されている。一辺30cmの角柱上の木管が、延長約80mにわたって検出されたもので、明治20年代に埋設された岩見沢市の開拓水道もしくは空知集治監外役所の水道施設と考えらている。

年度別調査面積一覧（事前発掘調査は略，単位 m²，1 m² 未満切り捨て）

遺跡名	所在地	委託者	工事	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度	61年度	62年度	63年度	計	遺跡の時期
美沢 4	苫小牧市	北海道開発局（札幌）	空港	3,100										3,100	縄文
美沢 5	〃	〃	〃	6,800							660			7,460	〃
美々 5	千歳市	〃	〃	752	8,450				6,544					15,746	〃
美沢 1	苫小牧市	〃	〃		2,340									2,340	〃
美沢 3	〃	〃	〃		3,480								17,464	20,944	〃
美々 4	千歳市	〃	〃		7,150			6,475	6,180	5,899				25,704	〃
美々 6	〃	〃	〃		3,450									3,450	〃
美々 7	〃	〃	〃		2,400									2,400	〃
美々 8	〃	〃	〃			11,900	3,875			1,828		11,112		28,715	縄文・擦文・中世
美々 9	〃	〃	〃					5,000						5,000	縄文
美々 2	〃	〃	〃						10,906	5,000				15,906	〃
美沢 10	苫小牧市	〃	市道								4,027			4,027	〃
美沢 11	〃	〃	〃								1,570	5,710		7,280	〃
美々 3	千歳市	〃	空港								4,565			4,565	〃
美沢 13	苫小牧市	〃	市道									2,185		2,185	〃
美利河 2 砂金採掘跡	今金町	北海道開発局（函館）	ダム			(66,880)								(66,880)	近世（測量調査）
美利河 1	〃	〃	〃					1,409	176					1,585	旧石器
中浜 E	恵山町	〃	国道						1,090					1,090	縄文
石川 1	函館市	〃	〃							700	3,432	6,328		10,460	旧石器・縄文
矢不来 2	上磯町	〃	〃								1,078			1,078	縄文
矢不来天満宮跡	〃	〃	〃									600		600	近世・近代
桔梗 2	函館市	〃	〃									3,540		3,540	縄文
美利河 1 砂金採掘跡	今金町	〃	ダム										(110,166)	(110,166)	〃（測量調査）
ユオイチャシ跡	平取町	北海道開発局（室蘭）	〃					1,986						1,986	チャシ
ポロモイチャシ跡	〃	〃	〃						3,100					3,100	〃
二風谷	〃	〃	〃							9,000				9,000	チャシ・中世～近世
楠	美深町	北海道開発局（旭川）	築堤		2,500	3,600	3,000	2,500						11,600	擦文
友進	音更町	北海道開発局（帯広）	畑総（道路）			2,017								2,017	縄文
東広里	深川市	北海道開発局（石狩川）	築堤									1,429	1,540	2,969	擦文
西野幌 12	江別市	北海道住宅都市部	運動公園				3,500	6,213	5,064	7,754	4,550	2,287	943	30,311	縄文・続縄文

遺跡名	所在地	委託者	工事	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度	61年度	62年度	63年度	計	遺跡の時期
西野幌11	江別市	北海道住宅都市部	運動公園					1,718	4,405	2,387				8,510	縄文・続縄文
西野幌13	〃	〃	〃					1,070						1,070	〃
西野幌14	〃	〃	〃						30			1,214		1,244	縄文
下学田	〃	〃	〃						227					227	〃
西野幌3	〃	札幌土木現業所	道々								476			476	〃
ママチ	千歳市	〃	河川・道々			1,370	1,630			950	716			4,666	縄文・擦文
東上泊	礼文町	稚内土木現業所	道々						312					312	続縄文
上泊3	〃	〃	〃						2,610					2,610	縄文・続縄文
上泊4	〃	〃	〃						333					333	続縄文
旭町1	三石町	室蘭土木現業所	〃			880	2,590							3,470	縄文
栄丘	浦河町	北海道	支庁舎					3,000						3,000	〃
小俗	上ノ国町	桧山支庁	農免農道							2,060				2,060	〃
豊田西	〃	〃	道営農地							1,100				1,100	〃
忍路土場	小樽市	後志支庁	広域農道							1,187	2,662	100		3,949	〃
忍路5	〃	〃	〃									1,763		1,763	縄文～擦文・近代
モンガクA	仁木町	〃	〃										2,460	2,460	縄文
モンガクB	〃	〃	〃										3,630	3,630	旧石器・縄文
モンガクF	〃	〃	〃										730	730	縄文
栄町5	余市町	〃	〃										4,191	4,191	〃
戸切地陣屋跡	上磯町	上磯町	史跡整備			4,095	4,500	3,500						12,095	近世・近代
西野幌1	江別市	日本道路公団（札幌）	縦貫道	18,503										18,503	縄文
東野幌1	〃	〃	〃	4,047										4,047	〃
大麻1	〃	〃	〃	3,450	10,370									13,820	縄文
吉井の沢1	〃	〃	〃		8,500	23,520								32,020	縄文・続縄文
富岸	登別市	〃	〃		960									960	縄文
川上B	〃	〃	〃		6,000		19,295	8,550	5,500	1,500				40,845	〃
千歳4	〃	〃	〃		1,890									1,890	〃
虎杖浜3	白老町	〃	〃		2,210		2,680							4,890	〃
虎杖浜4	〃	〃	〃		520									520	〃
社台1	〃	〃	〃		1,100									1,100	〃

遺跡名	所在地	委託者	工事	54年度	55年度	56年度	57年度	58年度	59年度	60年度	61年度	62年度	63年度	計	遺跡の時期
大麻 24	江別市	日本道路公団（札幌）	縦貫道			4,880								4,880	縄文
大麻 25	〃	〃	〃			980								980	〃
東山 5	岩見沢市	〃	〃			5,710								5,710	〃
千歳 5	登別市	〃	〃				3,980		1,150					5,130	〃
野々沢C	岩見沢市	〃	〃					5,318		1,022				6,340	縄文・近代
宮村 2	奈井江町	〃	〃							3,200				3,200	縄文
鈴山 2	砂川市	〃	〃							3,100				3,100	〃
茶志内 4	奈井江町	〃	〃							1,600				1,600	〃
嵐山 2	鷹栖町	〃	〃							4,950	2,925			7,875	旧石器・縄文
空知太 2	砂川市	〃	〃								8,600			8,600	縄文
国見 2	深川市	〃	〃								15,000	3,900	5,000	23,900	〃
向陽 2	〃	〃	〃								4,650			4,650	〃
亀田公園	登別市	〃	〃								2,355			2,355	〃
音江 2	深川市	〃	〃									9,930		9,930	〃
内園 2	〃	〃	〃									11,850		11,850	縄文・チャシ
納内6丁目付近	〃	〃	〃									5,284	8,540	13,824	縄文
納内 3	〃	〃	〃									12,192	40,253	52,445	〃
湯の里 2	知内町	日本鉄道建設公団（札幌）	鉄道					1,661						1,661	〃
湯の里 3	〃	〃	〃					181	100	830				1,111	〃
湯の里 4	〃	〃	〃					3,873						3,873	旧石器・縄文
湯の里 5	〃	〃	〃					1,392						1,392	縄文
湯の里 6	〃	〃	〃					663						663	〃
建川 1	木古内町	〃	〃						277					277	〃
新道 4	〃	〃	〃						5,532	4,034	5,467			15,033	旧石器・縄文
建川 2	〃	〃	〃							153	1,474			1,627	縄文
札刈	〃	日本国有鉄道（札幌）	〃							1,753				1,753	〃
堀株 1	泊村	北海道電力株式会社	国道付替				2,150							2,150	〃
堀株 2	〃	〃	〃				3,189							3,189	〃
合計		発掘調査		36,652	61,320	58,952	50,389	54,509	53,536	60,007	64,207	79,424	84,751	603,747	
		測量調査				(66,880)							(110,166)	(177,046)	

3　刊行調査報告書（発行順）

フレペツ遺跡群―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
大麻１遺跡・西野幌１遺跡・西野幌３遺跡・東野幌１遺跡
―北海道縦貫自動車道江別地区埋蔵文化財発掘調査報告書―
社台１遺跡・虎杖浜４遺跡・千歳４遺跡・富岸遺跡
―北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書―
大麻１遺跡　―北海道縦貫自動車道江別地区埋蔵文化財発掘調査報告書―
美沢川流域の遺跡群Ⅳ　―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
美沢川流域の遺跡群Ⅴ　―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
東山５遺跡　―北海道縦貫自動車道岩見沢地区埋蔵文化財発掘調査報告書―
吉井の沢の遺跡　―北海道縦貫自動車道江別地区埋蔵文化財発掘調査報告書―
友進遺跡　―国営畑地帯総合土地改良パイロット事業の内　鹿追地区Ａ～14号道路工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
美沢川流域の遺跡群Ⅵ　―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
ママチ遺跡　―ママチ川障害防止工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
旭町１遺跡　―道道富沢・日高三石（停）線特改第一種工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
虎杖浜３遺跡　―北海道縦貫自動車道白老地区埋蔵文化財発掘調査報告書―
千歳５遺跡　―北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書―
川上Ｂ遺跡　―北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書―
美沢川流域の遺跡群Ⅶ　―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
美深町　楠遺跡　―天塩川改修事業の内楠築堤工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
栄丘遺跡　―日高支庁庁舎移転改築用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
美沢川流域の遺跡群Ⅷ　―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
湯の里遺跡群　―津軽海峡線（北海道方）建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書―
礼文島幌泊段丘の遺跡群　東上泊・上泊３・上泊４遺跡　―道々礼文島線特改１種工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
登別市　川上Ｂ遺跡　―北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財第二次発掘調査報告書―
登別市　千歳５遺跡　―北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財第二次発掘調査報告書―
尻岸内町　中浜Ｅ遺跡　―尻岸内町中浜Ｅ遺跡埋蔵文化財発掘調査報告書―
今金町　美利河１遺跡　―美利河ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書―
美沢川流域の遺跡群Ⅸ　―新千歳空港建設用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―
江別市　西野幌11遺跡　―道々野幌総合運動公園線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書―
ユオイチャシ跡・ポロモイチャシ跡・二風谷遺跡
―沙流川総合開発事業（二風谷ダム建設用地内）埋蔵文化財発掘調査報告書―
登別市　川上Ｂ遺跡（Ｃ地区）　―北海道縦貫自動車道登別地区埋蔵文化財発掘調査報告書―

岩見沢市　野々沢C遺跡　—北海道縦貫自動車道岩見沢地区埋蔵文化財発掘調査報告書—

砂川市　焼山2遺跡、奈井江町　宮村2遺跡・茶志内4遺跡
—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

上ノ国町　小岱遺跡　—八幡野第一地区農免農道整備事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

上ノ国町　豊田西遺跡　—豊留地区道営農地開発事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

知内町　湯の里3遺跡　—津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—

木古内町　建川1・新道4遺跡
—津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(3)—

木古内町　札苅遺跡　—津軽海峡線(北海道方)連絡設備新設工事敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書　美沢川流域の遺跡群X、フレペッ遺跡群II、ペンケナイ川流域の遺跡群I

千歳市　ママチ遺跡III　—3・2・8真町泉沢大通改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

上磯町　矢不来2遺跡　——般国道228号上磯町矢不来法面防災工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

登別市　亀田公園遺跡　—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

江別市　西野幌3遺跡　—野幌総合運動公園線改良工事埋蔵文化財発掘調査報告書—

鷹栖町　嵐山2遺跡　—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

砂川市　空知太2遺跡　—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

深川市　向陽2遺跡　—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

木古内町　建川2・新道4遺跡　—津軽海峡線(北海道方)連絡設備新設工事敷地内埋蔵文化財発掘調査報告書(4)—

新千歳空港用地内埋蔵文化財発掘調査報告書　美沢川の遺跡群XI・ペンケナイ川流域の遺跡群II

函館市　石川1遺跡　——般国道5号函館新道道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

函館市　桔梗2遺跡　——般国道5号函館新道道路改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

上磯町　矢不来天満宮跡　—一般国道228号上磯町茂辺地法面工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

江別市　西野幌11遺跡・西野幌13遺跡・西野幌14遺跡・下学田遺跡
—道立野幌総合運動公園用地内埋蔵文化財発掘調査報告書—

深川市　音江2遺跡　—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

深川市　国見2遺跡　—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

深川市　内園2遺跡　—北海道縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書—

木古内町　新道4遺跡　—津軽海峡線(北海道方)建設工事埋蔵文化財発掘調査報告書(5)—

調 査 年 報 1

昭和63年度

平成元年3月31日発行

編集・発行　財団法人北海道埋蔵文化財センター
札幌市中央区南26条西11丁目
TEL (011) 561−3131

印　　刷　興国印刷株式会社
札幌市西区手稲東3南1丁目
TEL (011) 665−4155